

るまた素人相撲として回向院大相撲、則ち本場所に對するのは

○下總船橋太神宮の祭禮相撲であらう、大祭は例年十月月中旬で、當日に境内に於て素人相撲を催すのだが、場内は總て本場所式である、唯惜むらくは四本柱が紅白で、四神に方とれないので遺憾であるのだ、然ど相撲の取口は面白い、先づ出場する力士は

千葉縣と東京と組合せるのだ、其の東西は

○市川の河を境にしてある、東の方は小岩村小松川、本所、夫に市内の連中が混じる、西の方は千葉縣下、船橋、行徳、市川、中山と總て其の附近此東西は方角の正反対だから、或素人相撲に質した、すると、爾うてイ……御座す……本場所の東西同様て……と、細い肩をいかにして答へた。併しながら往時の相撲に、似通つて居るのは船橋の祭禮相撲である、勧進方と寄方と別にしてある、

○勧進方は千葉の力士で、寄方は東京の力士としてあるから、其の規定も頗る正しい、之が他流試合であつたら喧嘩の絶ぬであらうが、關東の素人相撲は回向院前の伊勢の海の配下に屬すので其の頭取、所謂世話人は孰れも伊勢の海の許しを得るのだ、地方

に於る相撲目代と同視されるのだから、世話人も

○無謀の力士を引率しない、夫に力士其の者も多少斯道では知名の連中だに據つて、敗たとて別に亂暴を働くないと云ふ事だ、乃て船橋の祭禮相撲に限つて懸賞品を、金額で受渡すのだから相撲の勝負に興を添る、先づ二番抜きの勝者には二十錢、一番抜きには十錢との相場であるから、腕力の逞しい敏捷家と來たら、職業を休んでも日給になるので、慰み半分に相撲取りにてかける連中が多い、兩國連の明鳥は先年大勝利を得て賞金五圓餘を齎して來た、すると明鳥の名は船橋全町へ響き頗る名譽を博したさうだ、夫に習慣として可笑いのは、

○見物が東西を異にして居る、西方則ち千葉縣下の者は、西溜りに見物をすると云ふ規定だから、東京方は無論東溜りである、恁う云ふ側て見物其の者も東西に分離るから、勝負に就いても一層に力が這入る、其の一例としたら西方力士が敗に歸すと、西溜りの見物人は總立となり、ヨツシヨイ……と鯨波を作つて土俵際まで押寄せる夫が爲に人波を打つやうな騒ぎが起る、不思議には別に喧嘩もしないが一時は勿々に躁がし

(八九三) 大相撲

觀

(八九三)

いので臨場の警察官が警戒を加える、一つは夫を面白がつてヨツシヨイ……とやらかし、相撲場は頗る雑閑を極めるのである、話しあはれるが此相撲の土俵に

◎圍繞する天幕 俗に水引と云へる物は、伊勢の海所有の物に限ると云ふ事だ、之は單に伊勢の海の繩張りを示す爲めてあるさうだ、夫に入幡講や祭禮相撲には、以前伊勢の海部屋の行司であつた小太郎と云ふ男が、何時も出張しては立行司を勤める、此小太郎だの刀根だのは多少専門家の薰陶を受けて居る、が、初心の素人から素人相撲の行司で、何處へ徃ても立行司の位置を占て居るのは神田の毎達磨だ、此男は相撲狂と云れるだけあつて總てが専門家で徃から可愛い、場所入りをすると同時に

◎先輩者に對して は、兄弟弟子さんも早よう……などの敬語を用ゆる、恁う云ふ按排だから軍配の戴き方も旨い、先年の事だが併を大相撲の行司にした、すると親戚から苦情が出て遂に行司にさせる事を中止とした、聞からして愛敬のある話してはある、また

◎又向島連の行司 に佐文と云ふ男があつた、此男も毎達磨には劣ぬ行司で、熱心の餘りに年寄音羽山の弟子となり、向島連の立行司で巾を利して居た、が、高聲を無理か

(九九三) 素人相撲

ら發音のて咽喉カタルに罹り、夫が病原となつて肺病で殞れた、なんと驚くほどの執心ではあるまいか、之は先代木村庄之助が

◎素人相撲へ登場 して、相撲會所(相撲協會)から大眼玉を頂戴した滑稽談がある、庄之助が未だ十五代目を相續しない前で、庄三郎と云つた時代、素人相撲へ混つて相撲を取つた事がある、行司になる位だから相撲は頗る巧みで、何處の土俵へ徃ても屹度先方の大關を破る、乃て庄三郎の雷名は素人相撲社會へ傳播した、此庄三郎へ對して片關と目されたるは、當時の賣出し俳優播磨屋市藏、(天德を演じて江戸市中)であつた、元來市藏が俳優に似氣なく力量が逞ましく、殊更に相撲を好んで素人相撲の群に入り、何時も庄三郎と好取組であつたから、人形町の鰻屋和田平の主人が發起人となり、向島二園境内で

◎素人連大相撲興行 を目論だ、其の兩關は東方が庄三郎で西方が市藏だ、土俵其の他の構造は悉皆本場所を摸し、加之に番附まで印刷するとの騒ぎだから、市中の評判是非常であつた、此噂が何時か會所の耳に入り、庄三郎は手厳しく譴責され、之が爲めに素人連大相撲も中止となり、夫から一層相撲會所の者が、素人連に打混る事の規則が嚴

しくなつたと云ふ事だ、また當時は流行に連るものと見ゆ

◎酒落た人が金方となつて、素人相撲を催す事が流行た、本場所木戸御免の鶴澤専糸が、まだ小庄と云た時代の事だが、小庄の旦那筋で神田川の綿貫と云ふ通人があつた。今で云つたら御用商人のやうな側で、錢金を湯水のやうに費ふ、其の友輩で藏前の平内と呼ぶ、之また綿貫に劣らない交際家で、孰れも好角家であつたから、何時も酒席には當時の著名力士、雲龍、不知火、鷺ヶ濱などが侍つた。或時の座興から向島植清（秋の闇）にて素人相撲を催す事にした、當日の四本柱へ座らせたのは

◎初代大纏長吉 後に出來山（山の師匠）となつた力士でまた土俵へ登る力士が主に藝人だから可笑い、吉原の幫間権平、有中、米八と例の専糸の小庄などが幕の内の側で、其の他力士は落語家もあれば箱丁も交る、常に綿貫や平内のれ側去らすの藝人どもであつた、懸う云ふ接排だから散し相撲は、弟子相撲がやつて来て勤める、總てが本場所式だから

◎藝人力士が土俵へ登場するにも、綿子の縄込みを繰るやうな事になる、縄込み一

切は原庭の玉垣から借入れ、弟子相撲に縄で貰つた、が、縄る方が専門家だから縄込みは遠慮なく縋る、借て縋られた者は何程力自慢ても、多寡が帮間、師匠、落語家などの遊民であるから

◎腰ばかりが縋つて 肝腎の足部へ力が遁入ないのと、土俵へ登ると腰が浮々として平常の伎倆を現す事ができず、果には折角の催しもれ茶番に過なかつた、併し其の催しの規模の大なる事は、素人相撲としては未曾有であつたと、専糸老人が昔し自慢に語られた事がある、結局素人相撲の計画は懸賞品に左右され、また懸賞品の可否に據つて、相撲場の盛衰があるのでさうな、

常陸山、梅ヶ谷、荒岩の名は片言交りの三ツ兒も既に之を知り大砲、梅ヶ谷と聞けば丁稚、おままでも尙ほ耳を聴だつるの心あり、今の總理大臣は誰と云ふことを知らぬ人々

にても大砲は横綱、常陸と梅は大關といふことだけは必ず之を知る世のさま、天下は悉く角通を以て埋められるかと思ふほどなれど、眞の角通を尋ねれば、老込み力士の勝星と一般、誠とに寥々とも云ふべきにや、相撲は午後より行き幕の内だけの勝負を見れば其にて澤山なりと大抵は午後より入場するもの多く肝腎の二三段目中に大に注目すべき取組のあることは同じ木戸錢を拂ひながら終に見す仕舞になるものが百人中の九十九人なり口には角力好きと稱しながら矢張此味を知らずに済す人の多きこそ口惜しけれ因て此には青年力士のみを紹介して此後角力を見る人の注意を促すこととなすべし、○野州山孝市 青年力士中にて野州山は既に世間にも名を知られ早くも既に幕の内に入りたる好力士の一人なり身長も十分あり力も相應にあり取口も鋭き方なれば先づは申し分なき力士なり其の最も得意とするは上手突張りにて氣合好き取口なれば悪るびれずして心地よし殊に力士中に一二を争ふ好男子にて双頬に靨を湛へ愛嬌滴々たれば人氣も自づから高く今源氏山が今泉と云はれて十兩中に幅を利かしたる當時に髪髪たり、巧者を云へば當時の今泉の方少しく勝りたるとは思へど出足は確かに今の野州山の方が勝り

たる處あれば中途にして挫折することなくば終には源氏山位の力士と爲ること難きにあらず之を他日の三役候補者に數へるも賞過にはあらず世間にては此力士を生意氣なり婦人に愛さるゝ爲め出世六ヶ歟からんと評するものあれど其等のこととは論するに足らず只此力士が人氣と腕前を併んで稽古に熱心を欠くの一點は大に戒むべきことにて之が爲めに進歩を妨げらるゝ場合なきにはあらず、中途に挫折せしめざるやう獎勵するが肝腎なり、野州山、本名は直井孝市明治十一年十一月を以て栃木縣芳賀郡物部村大字水戸部に生る、今は年寄尾上の尙ほ野州山と呼びし日、其故郷なるを以て伴ひ來りて藤の川と命名し前相撲より取上げしめ後其名を譲つて野州山と呼ばしむ、尾上は一時十兩力士中に名を知られしと雖も終に幕の中に入ることを得ずして廢業したり今野州山にして幸ひに中途挫折のことなくば恰も出羽の海に於ける常陸山の如く永く出藍の譽を博し得ん、

○大江山松太郎 材幹抜群、身の長五尺七寸、筋骨牢韌、肩開く腰強く今検査役尾車が尙ほ大戸平と稱し、幕下たりし當時に比して遜色なし年僅に二十歳を越す。体格成

終に迎へられて力士の群に入り友綱の門下中、海山國見山の二人と並び稱さるゝに至りたり身の長六尺、筋骨張硬、膂力計りがたきものあり、初めて二段目附出し登場敵を破ぶること席の如く終に全勝の榮を得たり其取り口を見るに毫も弱點なく突張るの力と寄り出すの銳どきは國見山に比して却つて恐るべきの銳氣あり殊に太刀山に一種の恐るべき辣手あり其腰の堅固なると長の高さとを利用し遠くより足を飛ばして無理に敵の足に乗り掛けつゝ力らに任かせて捻ち倒すの一手なり、先年國見山が稽古の際に足を傷つけられて終に休場するに至りたるも即ち之れが爲めにして此力士にして更らに成熟するに至らば敵方の力士中、能く敵する者は一二人に過ぎざるべく常陸山對太刀山の取組が満都の好角家をして殆んど狂せしむるに至るも近きの中の後にあるべし

○駒ヶ嶽國力 駒ヶ嶽は体軀偉大、筋骨頗る逞ましく太刀山、大江山と相ひ並んで青年力士中の翹楚なり、其取り口頗る堅固にして敵を押へてスックと立ち上りたる時の壯貌は幕内力士にも多く見ざるの好力士なり常陸山が未だ十兩に入らざる日、既に大關を凌ぐの奇觀ありしと同じく駒も亦早く幕の内を凌ぐの狀あるは誠と心得がたきの力士と云

熟に至らざるの今日にしてに既斯の若き發達あり取口は尙ほ若々しき處あり又無理の仕懸け手多しと雖も是れ却てつ力量の豪健なると氣象の精銳なるを證し其進境の益す多きを思はしめたり今日の地位を見るに太刀山及び駒ヶ嶽と三人鼎立して各々青年力士中の翹々且つ取り口の巧者に五六分を加ふる日に至らば敵方の幕内、中軸以下は恐らくは之れが爲めに風靡さることあらん、大江山、明治十五年十一月を以つて石川縣鳳至郡(能登)島崎村大字志賀浦に生る本名を田村松太郎と呼び幼より草相撲に入りて敵の恐るゝ處となり後大阪に赴き千田川の門に入りて大經と呼び後に東京に來り井筒嘉治郎(西の海)の門に入て大江山と命名し初めて出場の日より早く好角家の注目する處となり大江山の名は忽ち幕内力士一般に重ぜられたり

○太刀山 太刀山は富山縣姉美郡(越中)西吳羽村大字吉作の人なり本名を老元峰右衛門と云ひ明治十年八月を以て生る家は製茶を以て業となし太刀山亦製茶業に從事し其製する處の茶は曾て博覽會に出品して賞状を得たることあり、力士たらんとの希望は毫も念頭に置こと無かりしと雖も先年の春に於て相撲巡業の際、年寄友綱の見出す所となり

ふべし、駒ヶ嶽は宮城縣遠田郡涌谷町の人、本名を菊地國力と云ひ井筒門下にして三十一年一月初めて土俵上に登れり

○小綠初太郎 幕下力士中小綠と稱する人氣力士あることは其地位の割合に比して多く人に知られたり、彼は小体なりと雖も氣象頗る鋭く其土俵に上りたる有様は糊の利きし上に針子を張つたる反物の如く常にピンくとして心地よきこと比ひなし筋肉は然までの發達を見ざるも其割り合ひに比しては多く力量に富み且つ氣合よくして勵しき取口なれば青年力士中に屈指の人氣を博し土俵に出る時は熱心眼に溢れ然も悪びれずして眼の覺めさうなる力士なり、先年高の戸、唐辛等の人氣力士あり小綠或は是等の力士に近からんか、生地は名古屋市元須崎町にして姓を佐藤と云ふ父は同市の相撲年寄三ツ湊と稱し曾つて名古屋力士の大關たりしもの小綠亦幼より相撲を好み草相撲に入りて小湊と稱せしが出京して友綱の門下に入り改めて今の名を稱せり年二十六七歳、幕内力士としては呼び物たる事を得がたからんも之を幕下に置かんには土俵上、一つの花たることを得ん

○有明吾郎 勇氣勃々、敵を碎だかずんば我碎けんとの元氣あるは、有明吾郎の取口なり此力士離れて突張るの専門にして組て技の少なきは殘念なり生地は長崎縣南高東郡杉谷村にして明治十一年八月を以て生れ村山初五郎と呼び二十八年六月、伊勢の海門下として土俵に顯はれ累進して今地位に至れり

○玉椿憲次郎 小兵力士にして体軀殆んど常人に及ばずと雖も其相撲の巧者にして腰強きこと幕下中に於て屈指の呼びものなり一たび敵の躰に取りつくや護模の如く粘り鼠の如く動き反つて冠り櫻に抜け、廻つて残し潜つて渡し強敵と雖とも力を施こすの暇ならしむ素より幕の中力士にはあらずと雖も誰に組み合はしても看客を喜こばしむるも、土俵上に無くてかなはざるの名物力士なり、富山縣中新川郡(越中)砂子坂村に生れ本年甫て十九歳本姓を森野と云ひ十二三歳にして雷の門下に入り漢山と稱し其後玉ヶ関と改め早く好角家の注目する處となる其の体の小にして然も蹠提なる故玉垣の門下玉椿に酷似せるを以て再び改めて玉椿と云ふ

○小真龍大五郎 真龍は今之荒岩の前名なり人は其蹠提にして手取り力士なるを見て蓋

し荒岩門下なるべしと想像するも其實は伊勢の海門下にして荒岩に關係あることなし本名を矢島勝太郎と呼び東京神田の人、其取り口は殆ど玉樺に類似し其体格も亦甚だ相近し小真龍は即ち小真龍にして素より本真龍の荒岩たること難しと雖も二段目中玉樺と共に無かるべからざるの力士、好角家の常に喜こんて土俵上に歓迎するの一人なり力士が初めて序の口に入り若者頭の紹介に依て始めて其名と其人と土俵上に披露され時に當りては斯の如き小男が何故に何の目的を抱ひて力士となりしやと疑はしむる力士か初めて序の口に入り若者頭の紹介に依て始めて其名と其人と土俵上に披露されるもの多し玉樺、小真龍の如きは即ち其一人なりしと雖も今は二段目力士となつて看客の歓迎する處となれり、獨り玉樺、小真龍のみならず逆鉢、不知火の如きも當初恐くは看客の爲めに斯の如き感を抱かれたるやも知りがたし而して今は斯の如く名力士となれり力士の鑑定も亦難からずや

○立岩蘆太郎 肥満にして強硬、やゝ小錦の舊年に似たるを以て或る人、呼んで小錦の再身と云へり身の丈高からずと雖も梅ヶ谷に比して劣る處なく体量今既に二十七八貫以上あり彼の錦山に比して遜色なく然も取り口は錦山の如く遲鈍ならず順序よく發達せば

否に幕内力士のみならず三役力士たること難さにあらず只小錦の舊時に比して其ほどまでの巧者と元氣なしと雖も到底池中のものにはあらずるなり富山縣礪波郡(越中)柳樹野の人、安賀川由太郎と呼び明治十一年七月を以て生れ三年前同郷人越ヶ嶽の紹介を以て高砂門下に入る

○荒島與曾吉 三段目力士に荒島與曾吉あり体躯偉大、力頗る強し藤島門下にして田宮與曾吉と主ひ明治九年十一月を以て山形縣西村山郡(羽前)谷地大町に生る常に尾車部屋稽古場に行きて大砲、荒岩等の教授を受け他日有望の好力士なり。此力士曾て成田不動に養し一七日の断食を爲して相撲の出世を祈る歸り来れば既に大相撲の開場に逼る人皆危ぶんて其登場を諫止すると頻りなりと雖も荒島奮つて登場し終に四日間の連勝を得たり當人は以て不動の利益と爲すと雖も實は其体の強健なるに依れり然るに其次の場所よりして續いて場所運悪く、花相撲稽古等に於て優に強敵を制するの技倅を以て本場所には常に負け越し多く進歩少しがれども其實力と体格とは好角家の認めて許す處、一旦順境に復せば大に刮目するものあらん

以上は一二入を除くの外は悉の明治十年後出生の青年力士にして逐年好角家をして手の舞ひ足の踏むと知らざらしめんとするもの序にてに二段目力士中常に好角家に歓迎されつゝある人氣力士數人を紹介し置くべし、其人と名は既に世に知らるものと雖も其履歴は未だ紹介されるものなり

○小武藏菊太郎 腰の強きこと當時第一等の力士と稱せられ兩足蟹の如く開くと雖も臂の地に付くことなし、冠り反の名人として常に面白き相撲を取り初切相撲の如きは此力士に若くものなし明治九年東京深川に生れ伊勢崎菊太郎と呼び行司木村瀬平の門下にして初め鏡野と呼び後今之名に改む

○玉ヶ崎多介 小武藏、岳の越等と体格相伯仲し相撲も亦巧者なり、膚色白くして美、或る人評して横綱の露拂候補者と云ふ、

自から横綱たるに遠しと雖も幕の内力士たることは望み難きにあらず、青森縣中三戸郡

(陸中)田子村の人、姓を石井と云ひ始め四ツ浦と呼び高砂門下なり

○金山鶴吉 一日眇し尙ほ能く幕下の錦々たり彼が一日を失ひしつき一話あり今より

三四年前の年なりし越後地方巡業の際、入浴中に麻毒を双眼に受け其地の醫師に就ひて治療を乞ひしに、醫師一二種の薬を與へ之を點じ之を服すれば自づから平癒すべしと云ふ、居ること數日、痛み益す甚だし時の大關小錦之を聞いて諭して曰く麻毒は極めて凶惡なり早く東京に歸つて名醫の治を乞ふべしと即ち若干の旅費と一封の書を與へ因幡町の眼科故宮下ークトルの許に至らしむドクトル一診して嗚呼遲し左眼は既に廢れたり右眼も亦危しと云ふや金山、腰に下たる地方醫師の藥瓶二個を取つて双手に握みエー殘念と云ひさみヒシくと碎き涕雨の如く洒きしかばドクトル深く其意を憐み自から我家に置いて治療を加へ辛く右眼を治し得たりと云ふ金山は大分縣日田郡隈町の人明治元年八月を以て生れ高砂門下なり、始て隈川と云ふ、常に小錦の薰陶を受け眼疾を得て宮下ドクトルの許に在るや、小錦其巡業地より時々我衣服を送り與ふるに其袖中必ず三五圓の紙幣を容れあり小錦が人に對するの慈愛誠に感すべきものありとし曾てドクトルの直話をれば筆の因みに記るし置けり

○藤見嶽久助 福島縣岩代國一本松の人、明治十一年六月を以て生れ藤島門下なりと雖

も常に尾車部屋に來り、荒岩等の薰陶を受け居れり始み荒岩の教授を受くるに至り荒岩以て力士たるの望みなしと輕んじたり、然れ共彼が熱心は能く荒岩の取口を學び終に今日あるを致したり

○朝日龍倉吉 相撲に巧者にして注文に富みたり生地は兵庫縣荒原郡御影町にして本年二十七八歳、島倉吉と呼び高砂門下たり

大坂に於ける東京相撲

春

塘

東京の相撲が大阪に於て興行したとて、相撲は相撲で、之を別に變つた觀察をしやうと云ふのは、如何やら無理なやうな話してはあるが、其所が夫浪花の蘆も伊勢の濱哉で、處が變つたら形姿も自然變するに違ひない、其の形姿は兎まれ現在に見聞した處で、大いに異なつた節があるから、之を讀者諸君に紹介しやうと存するのである

▲相撲小屋の構造 廿三間四方で、屋根は葭賣を以て被ひ、周圍は板塀である、其の

棟敷出間割俱に代價は疊一疊で、代價の標準を定めるのである、之とても東京とは大いに異なつて居る、先づ興行日に據つて代價に高低があるから可笑い

▲初日の棟敷代 が疊一疊で二圓五十錢であつた、夫から船登りとなり六日目には、最高價の四圓五十錢とまで騰貴をしたのである、此四圓五十錢の棟敷代は千秋樂まで繼續するのが大阪の習慣ださうだ、夫に東京と違つて相撲茶屋がないから

▲上等の場所と いつたら、島之内の富田屋、扱ては土田、灘萬などと云ふ、著名的の貸席が其の場所を買切つて、之へ馴染の客を入れるのであるから、普通の看客が一疊買切るやうな事はできない、多く木戸から進入るのであるが、中木戸の際に棟敷方とて法被の背に、己れの名を染抜き之を着て居る男が、二十名程も居て看客を案内するやうになつて居る、其の場代も東京同様に、特別、一等、二等、三等の四級に分つて居るが、之とても

▲日々に代價の變更 を來すのである、仍り棟敷に同じ筆法で、初日より七日迄場代を勝るやうになつて居る、乃て棟敷も土間も東京のやうに、一間毎に枠が切てないか

ら、大入と來たら一疊へ十人程を詰られる勘定であるさうだ。乃て大いに趣きの異なつて居るのは、

▲場所裡の飲食店 東京の大場所にも無ではないが、表面に現れて居ないが大阪と來たら驚くに外なしだ。小屋の四隅を飲食店が占領して、之にはまむし（饅頭）すし、料理、せんさい（汁粉）しる、焼鳥などと記した、看板の挑燈を吊さげて居る、其の飲食店の大掛りたる事は、花見の掛茶屋に彷彿たるものである、此裡でしるとはなんであらうと、局外者には疑が起るに違ひないが、飲食店中で

▲しるが一致勢力 を有して居るのだ、しる屋はしる龜と云つて魚肉の味噌汁を賣るのだが、東京の本場所で坊主軍鶏の煎魚を賞翫すると一般で酒好家はしる龜のしるを吸なければ、角通のやうに思つて居ない、其の賣揚高も他の飲食店全體と、しる龜一軒とて、平均が取れると云ふ話してある、其の

▲しるの賣聲 も今は廢たが、一種不思議であつたそだ、先づ恁う云ふ按排に調子を引つ張り「芋の——れ汁あつたかい 旨い——の」と、膳へ汁碗を乗て看客の

中を賣て歩いたのが余り悠長であるとて遂に止だと云ふ話である、此外の賣物には随分と妙なものが澤山で、欠餅に八ツ橋煎餅を紙捻で束ね一束一錢宛て賣つて居る焼鳥の串差を大井へ盛込て、「上醤や上醤——」と賣つて居るのは、

▲東京の場所で 白丁徳利を吊ら提げ、「勝鳥賊に……熱たかいの」、と呼びながら焼鶏を賣つたのと先づ同様なものであらう、夫に料理と來たら辨當の代用品になるので、陶器の三組の蓋物へ詰てあるのだ、番籠ろくより外なしなのは正宗の壇詰賣である大阪では、

▲二合と四合壇 のみで、一合壇の正宗は賣ない、一軒に東京より見ると比格上、酒好家が多いと見え、何處の機敷、土間でも酒を被つて居るのを見受けられたのである、有繫に喰倒れを自負する大阪者の性根を現し妙に感じられた、飲食の事は爰らとして、今度は方面を替て、他の事を言うが、異に思はれたのは

▲土俵に用ゆる水桶 である、大阪流の水桶へ柄杓が附て居て、此柄杓で力士は水を付けるのだが、幕の内になると東京流の盆（桶のカサ）と改めた、其の水桶は同地の取締

氣を銳く妻た方が、相撲らしくつて心地が宜い、總てに寛裕があつて、關東者の眼には歯痒やうに思はれるのである。夫に

▲市中の觸太鼓は大阪相撲の人足を使役する事になつて居る。東京では太鼓觸れは休業の翌日廻すやうになつて居るが、大阪では左に非ずだ。毎日大太鼓三病に疣太鼓四柄を四區に分ち、終日市中を觸廻つて歩いて居るのだが、此人足は無給金で祝義が宛ださうである。其の祝儀とても花街の貸席で、僅に白銅一つ位な散財だから、東京の呼出しは太鼓觸には歩かないで、大阪相撲の人足に一任するのであるさうな。

▲其時の懸賞品は大阪新報社で猛虎の嚙て居る圖の化粧桿一連、また日本生命保險會社で記章の記した化粧桿が四連、之を幕の内、幕下、二段目の全勝力士へ懸賞するので、相撲協會では序の日、序の二段の力士へ糸織の反物四反を出した、すると同地の辯護士連が組織をした、相撲俱樂部で五十圓の懸賞を出したのだから、相撲場は懸賞の陳列場のやうであつた、何は併し相撲の隆盛は思ひやるべしだ、爰に相撲て尤も機敏を要するのは相撲場に於る。

中村芝吉の所有品で、大阪で相撲を興行するには、中村方で水桶を借る事の習慣になつて居る夫から

▲祝義の披露をする。のだが、また妙だ、金何圓、何關へ何某さんより下さると、呼出しが目録包を持って土俵で披露する。之は異觀であつたのに、四日目であつたが或る最負客から、太江山へ友禪縮緼の場所蒲團を贈つた。之をまた土俵で披露したのであるが、給金直しましてすると云つた大場所では、懇んな大阪流のチヤチを全廢したら好かうと思はれる、が、其の代りに

▲勝力士へ衣類を脱て、祝義に投てやると云ふやうな俠風は見かけなかつた、之とても土俵へ衣類を投たら、砂に塗れて汚れるのを憂慮するからであらうが、全體に土地の風俗として外見を衒ふので、祝義を名聞的に利用するに違ひない。夫に勝力士を喝采するにも、

▲常陸山一はん、梅ヶ谷一はんと、義太夫のアス調子で寝るのであるが、側から見ると何處となく間が延びて見える。土地最負ではないが東京流は常陸山、梅ヶ谷と謂

▲勝負附の一義である。回向院は元より花相撲でも、打出すと俱に木戸前にて勇ましい聲で、「相撲——勝負附……」と、云つて帳元根岸の子分が賣つて居る、其の敏捷なのは敬服せざるを得ずであるが、機として印刷したる過半を損失する事ができる、恁う云と如何やら東京競負のやうでれますか、實際爾うではちまへんと證明する事がある、根岸の方では結相撲(本日予秋)の勝負は豫定して、未だ勝負の定まらない裡に印刷を始める、恁うして置ないとイヤ終だから

▲相撲勝負附を賣る事ができない、之も豫定通りなら可か、折に觸ては勝負に狂ふ事がある、爾うしたら大變、今まで印刷したる勝負附は損失に歸して了たのであるが、此損失は眼中に措んで看客に満足するやう、算盤の可否を放棄して居るのが、帳元根岸の根岸たる感とも謂つべしてある

▲大阪の帳元則ち 勝負附の版元は劈頭から算盤で割出するものだから、版工部屋の準備が整頓せぬものと見ら、東京風に打出すと俱に勝負附と翌日の面觸を、印刷する事が容易でない、之を印刷したら如何であらうと老婆心に思ふのである、夫に此の

▲相撲勝負附を賣るのが、頗ぶる異なつて居るのが大阪の見物だ、第一番に相撲が終ても中々に、勝負附を賣得る事ができ得ない、殆ど一時間程も過ぎてから、漸くにして勝負附を賣出すやうになる、して、

▲勝負附を配達する男の服装が面白い、草鞋を穿ち弓張提燈を提げ、宛然に相場の通信社で各地方へ、打電するため、電信局へ馳するに異ならずだと、云つても宜い位なもので、印刷する版元配達の方が非常に進歩をして居るやうに思はれる夫は爾うだが大阪興行に對し注意を促さねばならぬ、事があるので、夫は場所の便所、則ち

▲小便桶の事で ある、飯糰形の中に入せと焼餅のした、糞桶の露出してあるのは衛生上如何と思はれる、大阪に於る東京相撲の改良に伴はつて爰等の改正までしてほしい、併し説明も下がつたから呼出しの拍子木と俱に爰てチヨンにする。

相撲協會

春

塘

本所元町に大相撲協會と軒洋燈に記した嚴めしい玄關構への家がある。此處が則ち東京大相撲組合事務所で、昔は其稱を相撲會所と云つたのだが、初代高砂浦五郎の改良に際し、大相撲協會と改めたのである。乃て協會の『人別帳』へ乗つて居る者を、總て協會員と見做してあるから、其中には力士も行司も混つて居れど、習慣として相撲年寄連のみを協會員と思ふのは可笑い。だが年寄其者が協會員の代表者となつて、百般の事務をとる處から、此稱の與るもの無理ではない。夫に協會の正面へ、

▲年寄の役割が張つてある。其席順は

○取締 高砂 ○検査役 尾車、井筒、武藏川、友綱、
峰崎、○焚出し部長 八角、二十山、若藤、伊勢の海 ○木戸部長 若 藤
玉垣、○焚出し部長 武限 ○焚出し 松ヶ根、荒沙 ○部屋廻り 佐渡ヶ嶽、境
尾車、○番附出版人 根岸 二十山 ○番附出版人 根岸

て、此年寄に就いて少しく、説明をしたいと思ふ夫も新舊を對照せねば、趣味もあるまいから、乃て新舊を對照する事にした。

▲目下は取締 と云へど、昔は筆頭と云ふて、其勢力も頗る非常に巾の利たものと見に一季の勵進元も幕場所の収益のよい時に定まつて居る。當時の專横と云つたら、宛然て、平相國か此條高時のやうな情態で、其比相撲會所の純益は筆頭、筆脇を肥したるのである。三代先の玉垣などは幕府の旗下以上の生活であつた。又同じ比の筆頭であつた、雲龍の追手風は頗る費澤を極め、暑中は屋根船二艘を涼船として、兩國の橋間へ繋がせ置き、夫より晚餐は山谷の八百善と極めて、船を何時も屹度山谷橋へ漕寄せるのであるが、陸地を歩行せずして自用の駕籠を、態々其處まで廻して置いて、夫へ乗つて八百善へ趣くなど、大名のれ留守居衆のやうであつたさうだ。此追手風の妻は稻本樓の小

(二二四) 大相撲観

稻と云つた花魁で、夫を數百金投じて根曳きをなし、人も羨む程の全盛であつたが、之等の費用は多く興行の純益金を瞞着し、當時不信用なる銀行の重役のやうなものであつた、或年の勵進元に三代前の友綱が當り、非常の大入であつたが、其割に歩金（純益の配當）の取れぬ所から、組頭の大歎の許へ行つて帳簿を見たいと云ふと大歎は眉毛を擡めて、一應は尤ともだが……私さへ未だ、會所（協會）の帳尻は見た事はないと咲笑した。此一言に友綱も斷念して帳簿を見なかつたと云ふ話しだ。此惡弊を一洗して會所の役員、即ち當時の協會員を平等にしたのは、故高砂浦五郎の規模であるげな、又

▲検査役八名 と云ふ者が、交代に四本柱に控へて居るが、昔しも仍り筆頭、筆脇と、組頭が検査員、夫へ『中改め』と云つて、三役に進んだ力士が、廢業して年寄株となつて、『中改め』と云ふ役を勤め、筆頭、筆脇、と俱に、四本柱へ据りて力士の成績を見る役とする、之が目下の検査役其者であらう。組頭とは

▲今部長 で木戸に若藤、追手風、棟敷に八角、伊勢の海、都合四名を選抜してある。此下に勤めて居る部下の中に、歩持年寄、平年寄の二種あつて、歩持年寄は加入金

百圓を協會へ拂ひ込むと、夫に對する興行毎の利益當配が來る平年寄は加入金も入らぬ代り、利益の配當を受られぬ話しだある。が、當時では年寄全體が歩持年寄となつた處で

▲年寄の階級 は最上等が『取締』、之に次くのが『検査役』であつて、『部長』は多く兼勤するものではあるが三級の位置を占め、四級が『木戸』に詰て居る年寄連中で、功勞のある老朽力士、五級が『十間棟敷』廻りて、之より出世をすると木戸へ詰るやうになる、六級が『新札場』木戸の脇の所に通券を貿つて居る係り、七級が『部屋廻り』讀んで文字の如く、力士の部屋々々を調査して歩く相撲道の巡査のやうなもので、八級が『焚出し』其他等外には、『中茶屋』場内設けある、中賣の監督する役であつて、又『寄場』と云ふのがあるが、之は文字が間違つて居るから可笑い、見物場所の紙摺を、賣る所であれば撲場として欲い、『大札場』昔しば筆頭、筆脇と帳元根岸が詰て居て、通券を新札場へ渡す所であつたが、當時では徒な手數を省いたので、大札場は合のみ存して居る位なものだ、『交渉委員』協會の出來事を引受け所、悪く云ば三百的事業である、以上記し

(三二四) 相撲協会

(四二四) 觀大撲相

た役員の外に
 ▲力士と兼業 の年寄は、宮城野「鳳凰」佐野山「朝汐」、錦島「大蛇鴻」、久米川「鬼龍山」出來山、「出來山」秀の山「天津風」、待乳山「舊臘死」、大獄「大獄」、甲山「大甲」、其他行司と兼業せしは庄之助「木村庄之助」、瀬平「木村瀬平」、伊之助「長島」、宗四郎「春日野」外に九紋龍が『間垣』を相續したとの話もある、之等の年寄兼業者は、木村庄之助を除て他は、師匠の相續者に限りて歩方利益の配當があるとの事だ。又師弟の關係以外の養子に對しては、歩方利益の配當をせぬ、規約である。

相撲一話一笑

好譜子

近比見聞せる相撲滑稽談を記して讀者の一哄に供すべし何れも有りし物語なれど故と人の名だけを除けり

○橋太鼓 大抵の人に橋太鼓は一人にて叩き居るものと心得居り一人にて能くも斯く

暇やかに叩けるものと思へど其實は二人にて叩き居るなり即ち一人が正面よりドンカと叩けば一人が側らにてドカ〜と叩くなり此太鼓を叩くに普通の太鼓を叩く如く撥の先にて叩く時は遠音の致さることにて撥の腹にて正面を叩くなれど其のみにては尚ほ遠音せずとて側らに在りて一人が太鼓の縁を叩き正面よりドンカと叩くを側らよりドカ〜と和すなり先年「ナマ徳」と渾名せし太鼓叩は古今の達者にて早晩順風の時は其音海を渡つて上總の木更津まで聞かたりと云へり、斯て此太鼓の音を昔しより種々に解釋し各聞く人に依りて正しくも滑稽にも聞ゆるなり「天下太平々々々」と叩くと云ふものれあばドデソ〜〜と叩くと云ふものあり、否ドデフル〜〜と響くなりと云ふものあり天下太平とは相撲を祝したる語ドデソ〜〜とは先年まで相撲の興行には損耗のみ續きしたま、ドデフルとは相撲の太鼓が廻れば雨が降ると云ひしより斯て云ひ習はせしなるが我或る時此太鼓打に向ひ貴公等の心には何と云ふ意にて叩くにやと問ひしに彼等は答へて、其時々の心にて叩くなり餘り塞き時は『呑みたい〜一杯呑みたい』と叩き美人の下を通る時は『ソリヤ來た〜〜』と叩き『分つた〜〜』と和し互ひに以心傳心に知らせ合

(五二四) 笑一話一見所撲相

(六二四) 相撲大觀

ひ却々天下太平ともドデソントモ叩かず、法華の太鼓を叩くに南無妙法蓮華經と叩くなれど一貫三百ドウデモイーと聞くるとて、お利口連の中には心の中に實際「一貫三百ドウデモイー」と叩くものありと聞けば我等の檜太鼓を叩くにも其時々に心に浮び目に觸れたるが自然太鼓の音に顯はるゝなりと語りしには覺はず一世を催ふしたりき

○女將の馬脚 相撲の隆興に從ひ他の藝人社會を始め料理店の主人、待合の女將等に至るまで相撲を見物せずして相撲の話の出來ざる時は客の前に肩身の狹き心地すとて誰も彼も回向院に足を運ぶ中に新橋の某待合の女將も一日客に伴られて横敷に入り始めて相撲を見しと云ふことは心耻しとや思ひけん種々力士の評判などして坐を濁し居たるが癪て土俵入となりて力士等が化粧廻し華麗に並びたるに女將は力士中第一の大男が大砲と知る處より「大砲の前掛(廻の事)」は立派なことチー」と云ひしため横敷中覺はず失笑したりとなん

○大と小 力士中にも大男の渠が或る家に行き大いなるものゝ話より小なるものゝ話に移りける時、其家人が小さきものゝ標本には斯るものもありとて胡麻一粒に『南無

(七二四) 笑一話一見所撲相

○阿彌陀佛』と書たるを出し示されしかば其力士は之を手に受け見しに天狗の羽團扇の如き掌なれば何時の間にか指の間だより胡麻を下に落し六尺裕の男が天保錢の如き眼して一粒の胡麻を探し立しさまは抱腹せざるものはなかりしと云へり

○幕の内は皆休場 或る人始めて相撲見物に行き歸りて人に語りけるは相撲は盛大なりと云へど彼やうに休場の力士多くては衰微の基なりと云ふ、何故かと問へば我行きて見物したる時は幕の内力士は土俵入のみにて悉く休場したりと云ふ、其何日目なりしやと問ふに、丁度十日目なりしと答へしは可笑からき

○新聞の記事 近來の新聞紙には相撲の事と云へば著の頗びしをも記載する甘黨もありて中にも毎場所三日目位に新橋のらしほは未だ顔を出さずと記し然もあしほは必ず入场し居るを知らざる新聞あり二段目とは幕下十枚までを云ひ一枚よりは三段目ならと思ひ駒ヶ岳は東の三段目幾枚、太刀山は西の三段目幾枚と記したる新聞もあり、響矢は最早や四十歳なりと記したる新聞もありき之等も滑稽の極なり

○名詮自稱 下の力士に羽衣と云ふあり能く敗を取りしかば年寄若藤曰く名が羽衣な

(八二四)

れば体が飛ぶなり早く名を改められと。又頭髪の七八分禿したる力士あり初め電氣燈と呼ぶ能くも名けたりと思ひしに今は月見山と改名せり同じ禿頭を意味したれど今のは雅味あり誰命名しけん力士社中にも風雅のものありと見えたり

○物を見て情を起す 或る力の部屋にて朝稽古を了り土俵の土の形の如く盛り上げ上に清めの鹽をぶり置きたるに一人の下戸なる力士が此邊には牡丹餅屋は無さやと問ふに、何故ぞと反問せしに土俵の土を盛り上げて鹽をぶりたる形の如何も牡丹餅も似たれば覺えず食思動きたりと答へしに一同失笑したりき

相撲界の隠語

春

塘

無邪氣な相撲社會にも隠語があつて、仕度部屋なぞでは仲間同士で遣つて居る、他の藝人とは趣きが變つて居て、可笑からうと思ふから茲へ掲げる事にした、

▲恵比壽講 充分に食事をする事、又飯を食ふ時にも用ゆる。

(九二四)

- ▲調子を下す 萬事輕蔑して下目に人を見る事。
- ▲丁場負け 世辭が宜くつて挨拶の出來ぬ事、又單に丁場と云ふのは世辭の事。
- ▲目鏡した 視いた時に云ふ語だが、總て覗く事を目鏡と云ふ。
- ▲れ天氣 錢の無い奴の事。
- ▲さしや 無一物で錢を遣ふ話をする手合を指して云ふ。
- ▲日下山を極る 立花のやうな脊高の力士て、寐ると蒲團から足が出る所で、勘定が不足て足を出すのを、斯云ひ始めた。
- ▲れ米 小遣錢の事を云ふ、力士の給金三兩にならぬ前は、れ米とて親方より小遣錢を出がら、三兩以下をお米相撲と云ふらうだ。
- ▲ハアちゃん 白痴の通稱となつたが、昔し中立庄太郎と云ふ親方の娘で、別嬪であつたが白痴だから、乃でハアちゃんと、女を捉へて冷評のである。
- ▲ヤシマン 水の勝た酒を云ふ、意味は香具師の萬金丹で服ても効ぬと云ふのを縮めたものだ。

(一三四)

▲仙臺道百兩 と云へば十兩の事であつて、總ての十倍又は駄法螺を吹くを、仙臺道かと問返すのが習慣になつて居る、此仔細と云つたら昔仙臺道は六丁一里、十里歩いて六十町であつたから起つた語だ。

▲堅くなる 塙遲れのする事。

▲たにまち 最負客を捉へて、散財させる事を云ふ。

▲石炭を焚け 非常に急ぐ事であるが、花相撲など雨でも降り出し相撲を取進せる此語を用ゆる。

▲其他少しく野卑だが、力士の骨牌合せに用ゆる語がある。

▲渡し場骨牌 錢なし連中で、勘定の都度に『乗つた〜』云ふから、此稱が起つた之に對する

▲ナル骨牌 渡し場と同じく、錢を出さずに之で何程にナルと、計算するからで、又騎着手段に

▲毛谷村三本 目下の大藏門左衛門は至つて騎着手段で、場にある札を曳いて来て、

何時も三本と騎着すから、不正をする奴を毛谷村三本、乃て失策の事を

▲君山ざらし 今は荒穢と云ふ年寄だが、眼が悪つて何時も晒を見違ひ、札を下して損をするから、見違ひる事を斯道では、君山ざらしと云ふる。

▲鳥賊のくそ 賭博で勝逃をする者を、鳥賊のくそと云ふが、鳥賊は海中で餌を食つて逃る時、くろの墨を吹くから、夫に做つたもの。

▲備後尾の道 寺が多い所である、乃て賭博の寺錢の多い事を、斯く云ふのであるさうだ。

角力雑観

兩國河邊黒人

力士の批評と角場の觀察と云ふもの近來の新聞雑誌上には欠くべからざるものへやうになつたが實は此批評と觀察と云ふものが六ヶ敷やうで容易のである、回向院へ二三回も足を運んだ新角廻は皆之をやつて居る、只其批評が見當違ひのと其觀察が横づくぼう

な計りである、今のやうに操鶴者が大膽の世の中では批評と觀察は誰にても書けるが、六ヶ敷のは力士の逸聞と斯道の内容である、是は回向院へ五年や六年足を運んだ丈では筆を下すことが出来ぬ少くも十年以上相撲茶屋の差入ものを食ひ五六千圓以上も遣つて見なくては分つたやうでも分らぬ處がある、未だ夫計りでは行かぬ、相撲年寄が何處ででもお辭儀をし、關取りに脊中を洗はせるまでに面を賣ぬ中は通のつもりでも通せぬ處がある僕は兎角皮肉を云たいのが癖で今度も一二三ヶ條憎まれ口を言つて見やうと思ふ、何ら流行の相撲だと云つても譽めて計り居られぬからである

○書生の見物少なき事

力士社會で自惚て言ふのを聞けば角力は尙武の具であるのに書生社會の觀物人が少ないのは遺憾である是は書生が柔弱のゆゑであらうと批難して居る之を或る新聞で布衍して今書生社會は女義太夫の後を追ふて醜体極つた所業と爲て居ながら尙武の一端とも云ふべき角力を觀物するものゝ少ないのは怪しからぬことである、今日の如く角力場は日々客止の大入りであるのに書生の客と云つては十分一にも足らない何か女義太夫の後を追と止めて角力でも見るやうに爲つてあらひたいと論じたの

がある、成ほど書生の客の少ないのは事實である、女義太夫の後を追ふのは止てもらひたいには相違ないが、角力の觀物に書生の少ないのは獨り書生の罪ではない、其實は角力の方が悪いのである、元來角力と云ふものは一日位見ても然ほど面白味を感じるものでない角力の眞味を知るには十日間を十日間とまでは行かずとも十日の相撲は五日以上見る覺悟で二季とも順次に見て行かぬ時は力士の變遷、長所短所が分らぬのである、變遷と長短を知らぬ目で角力を見ても世間で騒ぐ程に面白味の感ぜらるゝものではない、然るに近來角力の大入りに附上りて年々棧敷木戸錢等の價上げをして安いことでは角力を見られなくなつた數年前までは木戸が十錢、棧敷が四五十錢であつたから一圓以内で一日見ることが出来たのであるが段々價上げして今では木戸が二十錢棧敷が一圓位るとかつたのが今では歌舞伎座を見るのと殆んど同價となつて來た、ソレに芝居は一日見れば其芝居だけは澤山であるが角力は其を五日も十日も重ねなくては味ひが生ぜぬのである、月額の定まつた書生の親元仕送金では到底切り込むことの出來ぬのである、縱令や

切り込んで見た處が毎場所の兵糧込はも續かぬのである、是が書生客の少なき大原因で、其上に紳士とか紳商とか云ふ連中が大抵好い機敷は占領して仕舞ひ其餘波で動かすれば悪い機敷も少ないことがある夫を強て入場せんとすれば茶屋や機敷賣に格別の手當をせねばならぬのである、夫であるから角力の方でも眞實に書生を歓迎する了見があれば、然るべく學校の徽章又は相當の證據あるものには特別に安く見らるゝ方法でも設けて置かぬ時は角力は益す書生と遠ざかる計りである、之は書生の肩を持のではない角士の胴懸を喚すのである

○大慾か無慾か 大相撲十日間の總入費が凡う何程かと云ふに二萬圓内外に過ぎぬであろう芝居ならば團十郎と菊五郎兩人が十日間の給金位るのものであろう、ソレダカラ芝居は損計りして居るに角力は何時も一萬五千圓以上の純益がある、此は大さう角力の方が利口であるが其純益は何なるかと云ふに忽まち分け取りにして仕舞て此盛大の極に居て相撲協會には借金はあるとも餘財は少しもないのである、ダカラ或る時協會員に向つて、今の中に小しは用意したら好からう東京も追々地所が乏しくなるかも早く適當の地

を尋ね協會專有の興行地を買ひ求めてもしたら永世までも基礎が立つだらうと注意した其答へが斯だ、角力は一代限であるから、後のことを言ても多くの年寄どもが相談に上らぬに困る。何でも其時々の利益を分け取りにせなくては承知せぬと云ふ連中が多いのであるから到底基本などを溜ることが出来ぬ、協會員中にて心あるものは基本の事を思はぬではないが多數に無數到底其説が行はれぬのである、實は何時までも此盛つて計りは居ぬとは思はぬではないが、と此答へは一應最もではあるが一方には限りなく價あげをして一方には一文も残さず散して仕舞、所謂る宵越の錢は持ぬと云ふ大慾か無慾か理屈の分らぬ連中である

○力士の不熱心 何事も敵愾心がなくては劇しく行かぬ昔しは西と東がチヤンと分れて居て力士の重なるものは諸侯の抱へとなつて居たから本場所の勝負と云つたら殆んど命がけて立合ひには火の出るやうであつたが今日では諸侯の抱がなくなつて然なきだに張り合ひの薄らひだる上に東西の合併興行が續き敵も味方も差別の無くなつたのみならず互ひに其取り口を呑込んで居るので大相撲でも少しも敵愾心と云ふものが顯はれぬ。ソ

レに土俵へ出ても熱心の色が薄く力士の心得と云ふものがない四股を踏むにも只形計りで少しも力が入ることなく立ち合ひにもペテン立ちなど云ふことが流行し、眞との心得あるものが少い今の方士中にて立合ひに熱心の見ゆるは逆鋒を第一として荒岩、梅ヶ谷、常陸山、下つて小綠などは稍見るべきものであるが、其他は多くは軽卒にあらざれば狡猾で持ち切て居る。『中には大砲の如く自然大様にして輕卒狡猾と云ふべからざるものもあるが』先代式守蝸牛の言に『四股を踏むは氣を臍下に納めて心身動かさるがため、之に依て氣は鋭にして利劍の如し』と云ひ又『立合の意は本來無一物なり、野心ある時は中に虛處を生ず』と云ひ又『力強しと雖も氣柔かにして力を残し外弱く見ゆれども内剛にして丈夫なるを要す』と云ひ又『忍びは表を柔かにして内剛なるの所以、相撲道の第一義なり云々』と云つてある今の力士の中て斯る心得あるものは殆んど一人も得がたいと云つて好からう。昔は姑く置て近き頃も故の高砂とか朝日嶽とか云ふものは能き心懸けがあつて月夜に表に出て四股を踏むことを習つたことがあつたさうだ是れは單に力を練るの爲めのみでなく其影の地上に照らされて其様の悪しきか好きかを試して其惡し

さは改め好きは練熟することを力めたのである、今の力士は四股を踏むことは餘計のことの如く心得、立合ひにも体をコセッカセたり、先きへ出たり、手奥をかんだり、ソレハ〜見悪い様計りするのである、アツかり合ふ計りが稽古ではない、少しは心を練り体を定めることも稽古するやうに心がけさせたいものと思ふのである。

○相撲茶屋の利益 先年相撲の衰微した時には興行毎に損害が重つて歩持年寄中に利益の配當なきは勿論、却て損害の分擔金を徵發さるゝことが屢々あつた之が爲に相撲年寄は殆ど衣食住にも差支る計であつたが相撲茶屋は此時にも相應の収利があつて餘り困らずに暮して居たのであるから相撲年寄は常に『力士仲間は粥も啜れぬのに茶屋は莫大のことである、機敷の儲けや飲食物だけでは然したる事もあるまいが茶代と稱するものが大きいのである、二三十圓は下等の分で五六十圓が中等、その上等のものは百圓にも上る、是が十日間一間貰ひ切りの茶代である、是でなくては好い機敷が取れぬからであつて、茶屋が貪ぼる計りでなく客の方からせり上たのではあるが、此分では追を

茶屋が增長して力士は上等社會に占領され、平民的見物は益す虐待されて双眼鏡で見なくては力士の顔も別らぬ隅の遠き處へ追込まれて仕舞であらふ、芝居の方でも芝居を見る金と茶屋の茶代が匹敵して終には客足にも影響した處から昨今では茶代廢止説などが起て居るやうだが、相撲も今に此問題が始まつて來るに相違ない、茶屋の方では吳るのは頂だいて置くが當然だが相撲協會の方で早く注意を加へて看物の便を計るが畢竟は自分等の利益である、幸ひに今では相撲仲間でも刺身を食ふ餘裕が出來たのであるが茶屋の方では西洋料理も會席料理も食つて、ソレで財産を作つて居る、是だから第一に馬鹿にされて居るがち客で次が相撲仲間で利口なのは獨り茶屋計である

○力士と年寄

數年前までは年寄の權力が強くて力士は其下に屈伏して居たのであるが、昨今では全く反對して力士の權力が年寄を遙かに凌ぐ。最も二段目以下で餘り評判もない力士は矢張り親方々々と恐れて居るが幕の中は勿論、幕下でも多少人氣のある力士の權力には親方でも頭が上らぬ、成る程一人の人氣力士で何千人の看物を呼ぶと云ふ取組もあるから、力士の威張るが當然でもあらふが、之がために動すれば力士が苦

情を起して無理でも遁さうと考がへ、肝腎の日に休場したり、假病を使つたり、脱走を企てたりつまりは客の興を妨げることとなる、土俵上の勝負にも分り切た敗に物言をつけて預かりとしたり、待たせぬの苦情が始まつたり、屢々不体裁を演ずることがある、此分では今に検査役も何もいらないこととなる、今ではない既に検査役の有無を感じない位となつて居る、力士が役者であるから無理に之を壓制するには及ばぬが今の中に憲法でも作つて、せめては土俵上の失体だけでも防ぐことに致したらばよからう。

○行司の陶汰 新聞や雑誌で力士のことは八ヶ間敷云ふが行司のことは少しも書ぬから相撲の方でも之を度外にして其行なり放題に任かせてある、舊は行司が即ち相撲長で検査役を兼たやうなものであつて勝負は行司の左右に任せ、力士は苦情の云へぬものであつた、立合ひに『待た』の無い時代は、行司の引た團扇で何でも彼でも立たるのである谷風、小野川の將軍御覽の相撲にも小野川が不覺の『待た』をやつたのを行司が『氣負』と云つて谷風に團扇を上たまし苦情も起らぬ程であつた、然るに今の行司は有て無きが如して誰にも分る勝負は裁判が出来るが少し怪しい勝負には口出しの出来ぬのが多いので

(一四四) 大相撲

相撲觀

すべき連中である。藤次郎は土俵の働き勝負の見分については、上等の部であるが聲の胸間なので引立たない。一學に宗四郎は可もなく不可もないの部であつて其外は未だ芽生へて可否の評にからぬのであるから、姑らく前途の容子を見て遣へしだ。兎に角力士計りては相撲が引立たぬ。相撲仲間も好角家も新聞雑誌などでも行司の方面へも少しは注意をしてやるがよやい。

三十五年間番附

番附の創めて世に出でたるは今より追考すべからず蓋し相撲を以て専門とせしものありしのちに其一派の席順等を記して相撲場に掲げたるは勿論なるべければ之を番附と云ひ得べくんば足利時代既に其事ありしは追想するに餘りあり然ども之を彫刻印刷して世に廣佈せしは徳川後勵進相撲の盛んに行なはれしのちの事なることも明らかなり而して其印刷番附の今に存在したるもの凡そ百數葉と雖も浩瀚にして到底翻刻に堪ざるを以て始らく明治初年以後の幕内及び幕下十枚だけを記載す。

(一四四) 相撲觀

ある。此際行司の權限も定めて遣り、其代りに下らぬ行司はゾン／＼淘汰して仕舞が宜しいのである。我見る處では今の行司中、木村瀬平は先第一等で体度の工合と總ての取り廻しが他の行司の摸範である。只音聲の甲走たのが耳ざはりである。此男は元は美音の譽があつたさうだが今では齒の抜けた爲めに無理の聲を遺ふ悲しさは斯は甲走つて耳にさはるのであるさうだが惜い事だ。木村庄之助は口上は瀬平よりも上手だ、勿論美音ではない寧ろ胸間聲に近いが、何處かに位があつて大い様に思はれる。腹も瀬平より太いのであらう。瀬平の方は俠である、庄之助の方は地歩を占めて居る。其代りに土俵へ出ては少しも働くくな、人も知る通りのヨイ／＼であるから、之は土俵へ出すのが、無理だ、ソコで口上は庄之助、土俵は瀬平を以て次が式守伊之助である。是は伊之助を襲だ當時は見られなかつたが今日では大いに位るづいた、庄之助、瀬平には未だ／＼遠く並べぬが乘たものではない。次は本村進である、之は大坂から來たので未だ人氣がないが中々シツカリして居る。次ぎに庄三郎、錦太夫、勘太夫、興太夫などは熱心家で追々上達して行くから今に立派のものになるだらうが、庄九郎、庄太郎、朝之助などは淘汰

(三四四) 附 番 摂 相

同同前頭 前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關 東明
玉鬼立幕兜尾田高國磐相大象境方治一直戶岩武大鬼玉兜幕高
の子見見ケ三年上ヶケ者の見
戸彈神山上浦山山石生纏鼻川三力柳山峰崎渾彈井戸山
下西月下
深五荒箕鰐鶴佐鬼朝小兩東鬼方浦壽二勝深五立荒荒箕
月のケ野ケ日面十月の海
柳山島島海瀧山崎嶽柳國關山淡山山柳山神馬飛島海

同同同同同同前頭 前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關 東同
獨直岩中鬼松立武幕尾田兜國高磐相兩東境方年獨松戸直岩武大
高ケク者子見見十高ケ上ヶケ
山柳峯川若枝神崎上浦山山石生國關川月山枝山柳峯崎渾
下西
清伊荒浦山勝五荒鶴箕鰐佐鬼朝小大象鬼方二志伊鬼浦勝荒
勢見ケ月の野ケ日ケ面賀勢十ヶ
鷺嶽飛湊分山山島瀧島海山崎嶽柳纏鼻山山海嶽若淡山瀧

同同同同同同同前頭 前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關 東明
東同方年武大獅二獨岩直鬼松武幕勝山箕國兜磐高綾兩境方治柏一
十歲子十高ケタケ見瀬四年三山力
月鴻淀嶽山山峯柳若枝渾山分島山山石砂川國川西月
西方荒投荒荒一若伊清浦立五鶴荒鰐佐鬼朝小大象方二若
勢見ケ月の野ケ日ケ十
岩石虎飛力島嶽飛神山瀧馬海山崎嶽柳纏鼻山山

觀 大 摂 相 (二四四)

同同同同同同同前頭 前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關 東明
東方治伊鬼釋演玉大玉相尾幕象國桑照浦增大宮平不方治元年
元勢迦の文のケ見のケ位城知
火前十涼彈峯山風井字戸生上鼻山弓嶽風山纏野石火
頭西一方月立岩立箕荒大足鰐鬼佐盤小田朝鶴千兩東常鬼方
鬼千年ケ代のケ野子日羽盤面
面山川神峯川島飛渾山海崎山石柳浦嶽濱嶽國關山山

前前小關大頭頭結脇關 同同同同同同同前頭 前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇
東明象宮大增不方治兜戸演立高伊鬼玉尾幕桑國相象浦宮大增平
ケ城位知二年上見のの見ケ城位
鼻野纏山火三山山風山山海彈井戸上弓山生鼻風野纏山石
西月
兩東千常鬼方二立岩島大足箕荒號佐
年盤面十ヶ田代の野子日ケ盤
國關山山山神峯川渾山島飛海山崎浦石柳嶽瀧國關山

前前前前前前小關大頭頭頭頭頭結脇關 同同同同同同同前頭 前前前前前前
東同尾田國盤相象大增不方年二戸演伊鬼足兜玉高箕幕佐田國盤相
子見ケ位知二十上勢代の見野の見
上浦山石生鼻纏山火月山山風演彈山戸山島山浦山石生
西
佐鬼鶴朝小兩東千鬼方纏立岩立大島玉荒號尾鬼朝小鶴
野ケ日年面ケ田ののケ日ケ
山崎瀧嶽柳國關山川張川峯神渾川井飛海上崎嶽柳濱

(五四四) 附 番 摸 相

洞同同同前頭	前前前前前前小關大頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同同同四同前頭
一投繩松若幕	勝手鬼鷲四佐高大雷境方年	大越邊眞一綱投立若松
高ケ	柄 ケ海野	十 見ケケ 高 ケ
力石山枝島	山山若濱波山砂纏電川	月 崎崎嶺崎力山石神島枝
下	清鬼最浦鬼盤鯨朝小綱方	生藤玉藻梅錦武荒鷲
錦鷲荒鷲武子廣	見面上 ケ の日 潤	野田 のケ 嶽 子
木谷虎嶽鴻	鴻山山風崎石海嶽柳川	松川椿風戸谷水呂虎嶽

同同同同同同前頭	前前前前前前小關大頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同同同佛 東明番
府邊邊小流投綱荒野	勝若鷲手勝四佐大雷境方治	附此越邊邊小流 に時
中ケケ高	ケ柄の海野	七年黒高ケケケ
山崎嶺崎石山虎	山島濱山浦波山纏電川	二引等崎嶺崎嶺
下	最武鬼清鬼浦盤鯨朝綱方	西月發別布派藤大玉玉藤
龍荒大稻錦藤松梅	上藏面見ケ	すな立田見 の
見 のケケ	の日 潤	たれ川崎風椿戸
神角崎川木戸枝谷	山鴻山鴻崎風石海嶽川	

同同同同同同同同前頭	前前前前前前小關大頭頭頭頭頭結脇關	同同
明治上越八神出邊小綱松投幕	荒鷲若手勝四佐大雷境	東同
八年 梓野高ケ	ケ柄の海野	勝方年 八越
四月 沙崎鴻崎山嶺崎山枝石	虎濱島山浦波山纏電川	十二雲ケ
甲藤藤荒大稻藤眞	鬼梅清鬼武盤浦鯨朝綱	山月鴻嶺
田の見の	面ケ見ケ藏	西月小方藤玉
岩崎川川角淀崎川戸崎	山谷鴻崎鴻石風海嶽柳	田川椿

觀 大 摸 相 (四四四)

小關大結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關
朝兩境	東明綱方治	朝武鄉荒二直伊松清浦幕
日瀬	五日歲ケ	勝山鷲國鯨磐朝綱兩境
嶽國川	年	ヶ見の 日瀬
川	三森鴻嶽虎山柳嶽枝鴻嶽	山分濱山海石嶽川國川
小大象	月	下
ケ	真錦荒一岩若彌立武鬼	鶴鬼荒佐鬼兜高小大象
柳纏鼻	ケ高者	ケ面野ケ
	崎木飛力峯島山神崎若	瀧山馬山崎山砂柳纏鼻

前前前前小關大頭頭頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前
鷲四盤高兜大境方年	東同	頭頭頭頭頭頭頭
ケ海	沈朝武岩荒直松獅最浦幕	鬼山勝國荒鯨盤
濱波石砂山纏川	十一日歲ケ	子上見 見の
西	西月崎嶺鴻峯虎柳枝嶽山鴻	若分山山馬海石
鬼佐鯨朝小兩綱方	下	下
ケ野の日 潤	玉梅投錦一二彌立若武	浦鬼鷲佐鬼兜高
崎山海嶽柳國川	ケ十高者	面ケ野ケ
	椿谷石木力山山神島崎	風山濱山崎山砂

前前前前前前小關大頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前
幕最手鬼鷲四盤高大雷境方治	東明	頭頭
上柄ケ海	六六年	者
山山若濱浪石砂纏電川	崎嶺崎石鴻山山島枝鴻	崎山若
下清勝鬼浦鬼佐鯨朝小綱方	西月	下
見面ケ野の日 潤	境玉梅錦一立荒獅最	山鬼浦
鴻山山風崎山海嶽柳川	ケ子上	面
	野風椿谷木力神虎嶽山	分山風

(七四四) 附 番 摸 相

前頭	前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前頭
			東明
藤幕	投清小四勝小大若浦境方治浦藤悠稻島上藤出藤荒幕	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
の見ヶ野	見ヶ野の十年久瀬田ヶ田辺の見	東同	東同
川下	石鴻崎波浦柳纏島風川五月漁山川川沙川山川角	雷境方年	島上藤邊山櫛荒松小投幕
長	勝佐鬼荒手武鮫梅朝雷方象柄白旗邊長神稻大大	十	勝鷲荒手若勝四佐大雷境方
	・野面 捺藏のケ日	一	田ヶのケ高ヶ野
山	山山山虎山鴻海谷嶽電	月	ケ柄の海野
	嶽平山森開山崎川崎淀	西	川沙川漁山山角枝崎石
		朝綾方	山濱虎山島浦波山纏電川
		日瀬	下
		嶽長甲藤神大稻大鮫藤	西
		鬼清鬼梅武磐浦小鮫朝綾方	朝綾方
		田見の面見ヶケ藏	日瀬
		嶽川	山鴻崎谷鴻石風柳海嶽川

同同同同前頭	前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同同同	
			東同
稻敷出荒藤幕	上藤投清四勝大浦若境	方年象千白浦稻島出藤上	前前小關大 頭頭結脇關
防釋田	ケの見海の	十ヶ勝 順田ヶ	同同同同同同同同前頭
瀬の迦		月漁山漁川川山川沙	前前前前前前前前小 頭頭頭頭頭頭頭頭結
川森山角川	沙川石鴻波浦纏風島川	西	東明
下		阿方	若浦大雷境方治
高邊島長大	神稻佐鬼荒手武鮫梅朝	高柄佐鬼邊稻神荒大	稻四浦島上達藤出荒小幕
千ヶ田	野面 捺藏のケ日	千の倉の防ヶ	投鷲清手勝若四浦大
穂賀川山淀	崎川山山虎山鴻海谷嶽松	穂平川森開山崎角淀	九年瀬方 田ヶの迦ヶ野

同同同同同同前頭	前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭結脇關	同同同同	
			東明
藤勢朝千出白浦稻荒幕	藤上藤清四手勝浦若境	方治藤朝千白浦	前前前前前前前前小 頭頭頭頭頭頭頭頭
見勝迦	瀬田ヶの見海柄の	十見勝	東同
繩洋森山山漁川角	川沙川鴻波山浦風島川	年繩洋森山漁	小勝四小若大浦境方年
下		西五	嶽四藤悠稻浦島藤出荒幕
佐誠忍高柄島長邊大	稻投千鬼荒武大鮫梅朝	阿方月大茅忍佐柄	投小清手勝四
倉の千の田ヶ	羽面藏のケ日	武の田倉の	野の海
川森川穂平川山鴻淀	川石嶽山虎鴻纏海谷嶽松	戸川川平	十の方久瀬田田辺野

觀 大 摸 相 (六四四)

關大脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
		東同
雷境方年	島上藤邊山櫛荒松小投幕	東
十	勝鷲荒手若勝四佐大雷境方	野
一	田ヶのケ高ヶ野	ケ柄の海野
電川	川沙川漁山山角枝崎石	山濱虎山島浦波山纏電川
西		下
朝綾方	塊長甲藤神大稻大鮫藤	西
日瀬	鬼清鬼梅武磐浦小鮫朝綾方	朝綾方
	田見の面見ヶケ藏	日瀬
嶽川	野山岩川崎崎川淀戸	山鴻崎谷鴻石風柳海嶽川

前前小關大 頭頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小 頭頭頭頭頭頭頭頭結
		東明
若浦大雷境方治	稻四浦島上達藤出荒小幕	稻四浦島上達藤出荒小幕
九年瀬方	投鷲清手勝若四浦大	投鷲清手勝若四浦大
	ケ見柄の海	ケ見柄の海
島風纏電川	川山港川沙漁川山角崎	石濱鴻山浦島浪風纏
西月		下
梅小鮫朝綾方	白八境長藤大神稻大藤	勝鬼鬼荒梅武佐小鮫
ケの日瀬	雲田見のケ面ケ藏野の	ケ面ケ藏野の
谷柳海嶽川	山鴻野山川崎崎川淀戸	山崎山虎谷鴻山柳海

前前前前前小關大 頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小 頭頭頭頭頭頭頭頭
		東同
小勝四小若大浦境方年	嶽四藤悠稻浦島藤出荒幕	小勝四小若大浦境方年
野の海	投小清手勝四	野の海
ヶ	十の方久瀬田田辺野	ヶ
崎浦波柳島纏風川	越山漁山川港川山角	石崎鴻山浦波
西		下
佐荒手武梅鮫朝雷方	柄佐白境長藤大神稻大	勝鷲鬼荒佐武
野の柄藏ヶの日	の倉ケ見	ケ面野藏
山虎山鴻谷海嶽電	平川境野開山崎川淀崎	山濱山虎山鴻

(九四四) 附 番 摂 相

同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
明伊立大音浦勢忍中千常幕	島稻入清勝荒藤浦響手若境
勢田羽津勝陸	田間見の田柄
十四年流野邊山湊川山森山	川川川鴻浦角川風矢山島川
一月下小荒柳武和九龍片長高	達井炳司千藤荒大鯱武阿梅
武の藏田紋ケ男千	ケの天羽のの藏武ケ
藏玉花野森龍昇浪山穂	關筒平龍嶽川虎纏海鴻松谷

東方 前頭 西上方 ケ汐

同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
東同火伊音武立中浦勢千常幕	島入高上浦勝柏關響荒手若
勢の紋藏田津勝陸	田間千ケのの柄
五月達流野邊山湊森山	川川穗沙風浦戸矢虎山島
西方一稻小和片九忍龍良	井達稻千大清荒炳司阿武梅
本の武田男紋ケ	ケ羽見の天武藏ケ
松花藏森玉波龍川昇山	筒關川嶽纏鴻角平龍松鴻谷

大關 東境方 川 西方

同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
東同櫛石小伊音中立浦千常幕	島入高上勝浦柏關響荒手若
五月の勢羽津田勝陸	田間千ケのの柄
越川川流山山野湊森山	川川穗沙浦風戸矢虎山島
西方大小大和片稻龍九忍良	荒達稻大千荒阿清炳司武梅
和武田男のケ紋	ケ羽見の天藏ケ
錦藏逆森波花昇龍川山	玉關川纏嶽筒松鴻平龍鴻谷

井筒

(八四四) 觀 大 摂 相

同同同同同同同同前頭 備考	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
五常武中忍出千白油荒勢幕	稻藤四上藤勝清手浦若境
月場陸戰津勝	瀬田海ケの見柄
所より高砂和敵龍佐朝長炳島大高	川川波沙川浦鴻山風島川
改田防組の倉見の田千	下鬼達稻響井荒千大鯱武梅
加森森象川洋山平川湊建	面ケ羽の藏ケ
	山關川矢筒虎嶽纏海鴻谷

同 東同 阿方年十の武 松西 方 常陸 山

同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
荒嶽九常中武油忍出勢朝幕	入荒井藤清四響手勝阿武境方治
の紋陸津勝	間田見海柄の武藏
玉越龍山山野津川山洋	川角筒川鴻波矢山浦松鴻川
一國和司龍千大炳島高長	下鬼稻達藤上荒千大鯱浦若梅方月
助田天ケ勝の田千	面ケのケ羽のケ
顯森龍象森津平川穂山	山川關川沙虎嶽纏海風島谷

東明治十二年 西六年 入し附錄番附を出す

同同同同同同同同前頭 備考	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關
同年常常忍油中勢龍島千炳幕	入稻清藤荒勝響手武阿境方治
五月陸津ケ田勝の	間見田の柄藏武
川山川湊山鼻川森平	川川鴻川角浦矢山鴻松川
下竹稻和音武九長片司高	下達非荒千上藤大浦鯱若梅方月
の田羽藏故男天千	ケ羽ケのケ
林花森山野龍山浪龍穂	關筒虎嶽沙川纏海風島谷

東明治十三年 西一年 此年一月與二月に移るに休業し直ちに

(一五四)

附 番 摂 相

前小關大頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前頭頭頭頭頭頭頭頭
手劍大梅方治柄 鳴ヶ	菊萱浦長千島入荒達演幕 ケ田 勝田間 タの 演川濱山森川川飛聲音	龍若立柏關出上高千 ケ田 の來ケ千ヶ 鼻山野戸戸山沙穂嶽
山山門谷	西一年客席	下
浦高西楯方月見の風山海山	岩綾音中若出忍勢伊 の羽津の田釋 勢 里浪山山川森山川	一稻勝井常清大高浦 のの陸見 見 矢花浦筒山渴達山風

前前小關大頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前頭頭頭頭頭頭頭頭
手鞆劍大梅方年柄の鳴ヶ	芝翫萱音島長浦入荒故幕 田ケ田羽田 間 ク	友柏關廣上緋千高鞆 ののケ 羽千の
山平山門谷	西五年五月	下
高緋大西楯方見の山誠達海山	大増綾和忍九中出 野位 田ケ勝 紋津 川山浪森關森川龍山山	伊勢井稻一常清大武 勢 のの陸見 藏 濱イ筒花矢山渴達鴻

前小關大頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前頭頭頭頭頭頭頭頭
鞆劍大梅の鳴ヶ	嵐荒音島九増達中浦伊幕 羽田紋位ケ津 勢 の 平山門谷	關勞荒清常上友柏高 の見陸ケ 千 戸イ飛鴻山沙網戸穂
千高高西羽千見の嶽穗山海達	西一年十八年	下
大方月芝八萱千長和入桐立 田幡田勝 田間 ケ田	稻廣井出海一武千浦 のの 釋 の藏 花海筒山山矢渴嶽風	

(〇五四) 觀 大 摂 相

大關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭頭
手柄	東明若方治十勢 柄の鳴ヶ	伊中島音長千浦立勢入幕 津田羽勝田間のケ陸の來 島年演山川山山森漬野川
山	西一年五	海關山風浦山虎嶽嶽鴻門山
梅方月見の谷	梅方月日若和忍小九龍稻島 ケ下田の武紋ケの田	井稻大桐高關上清高鞆梅 千のケ見見のケ
海山	谷	筒川達山穂戸汐渴山平谷

小關大結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前小關頭頭頭頭頭頭
手柄	東明大鞆梅方治十勢 柄の鳴ヶ	泉伊萱音和忍浦稻立勢幕 勢田羽の田の田 田間千のケの藏柄
山	門平谷年	瀧演川山山森川漬花野川川穂浦沙風戸戸虎渴山
海山	西一年	下
梅方月見の谷	手武楯方月大若小九片龍千大長常 柄藏	井達稻出緋清桐千鞆高司 和武紋男ケ勝 陸ケ來見羽の見天
海山	山瀉山	錦山藏龍波鼻森達山山筒關川山嶽渴山平山龍

前小關大頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前前前前前頭頭頭頭
手柄	東同劍方年	萱演長音千浦若入荒故幕達立出高柏上緋千關
梅の鳴ヶ	五月	田の羽勝間 ケ田來千ケ羽の 川音山山森川漬山飛聲
平山門谷	山	下
武西手楯藏の柄	西方	稻勝井常西清浦高大 のの 陸の見 見
渴海山山風	風	花浦筒山海渴風山達

(三五四) 附 番 摂 相

前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同同同前頭	前前前前 頭頭頭頭	
綾八知海千鶴鞆大劍 瀬幡の惠羽ヶの鳴 川山矢山嶽濱平門山 綾嵐上高常友一西大 ケ見陸の千 浪山沙山山綱矢海達穗	東明出方治廿年 綱之助 一毛川森矢山雲イ梅谷野 野若干浦龍達龍九 州年 山淡川淡門龍鼻矢龍	丸三千梅増那勢白丸立幕 兜吉勝の位 一毛川森矢山雲イ梅谷野 野若干浦龍達龍九 州年 山淡川淡門龍鼻矢龍	桐綾廣絆 瀬の 山川海誠 嵐武出伊 釋勢迦の 山隈山濱

前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同前頭	前前前 頭頭頭
廣知綾千八鶴海鞆大劍 瀬幡ケの鳴 海矢川嶽山濱山平門山 綾高常上嵐高友西一大 見陸ケ千の 浪山山沙山穂綱海達山	東同方年 平音鬼朝白梅勢泉黒龍幕 五月の野鹿日の 月川毛川梅矢イ瀬雲門 取若増雷野九相雲千 位州紋の年 倉淡山雲山龍生矢龍川	廣絆鬼 のケ 海誠谷 桐柏伊 勢の 山戸濱

前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同前頭	前前前 頭頭頭	
若知千八鬼鶴海鞆高大劍 惠羽幡ケの千鳴 淡矢嶽山谷濱山平穂門山 相眞高綾上柏常嵐西一大 見ケ陸の 生龍山浪沙戸山山海矢達	東明出方治廿年 のケ 年 西一 月 武の州紋 キ松力矢山龍淡山生龍	藤山黒勢黒鬼朝泉平龍幕 のの鹿日の 森音誠イ雲毛川瀬月門 項阿勢雲野九若桐相眞 武の州紋 キ松力矢山龍淡山生龍	綾眞鬼 ケ 械力谷 千伊柏 勢 川戸濱

觀 大 摂 相 (二五四)

前前前小關大 頭頭頭結脇關	同同同同同同前頭	前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
武上鞆大劍梅方年 タの鳴ケ 隈汐平門山谷 綾一高高大西方 の見千の 械矢山穂達海	東同 五月 西 初綾千壹達桐八入立鶴 勝田ケ幡間田の 陣浪森川雲山山川野演	藤島荒浦和增嵐中九稻幕 の田位津紋の 戸川石濱森山山山龍花 下 勢出清海廣絆一常 釋見のの陸 イ山鷗山海誠矢山

前前前前小關大 頭頭頭結脇關	同同同同同同前頭	前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
知伊友上鞆大劍方治 恵勢ケの鳴 矢濱綱汐平門山 廣千常高高西大方 のケ陸見千の 海嶽山山穂海達	東明 十九年 西一 月 龍甲龍壹達桐八綾立風 ケ田ケ幡田 門山雲川雲山山浪野山	平増千浦和入九中勢沼幕 の田勝田間校津位 戸川森濱森川龍山イ山 下 鶴出清廣海千常 釋見の羽陸 濱山鷗山海山嶽山

前前前前前前小關大 頭頭頭頭頭頭結脇關	同同同同同同前頭	前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
八知千鶴友海鞆大劍方年 惠羽幡ケの鳴 山矢嶽濱綱山平門山 祐綾高上常一高西大方 見ケ陸の千の 戸浪山浪沙山穂海達	東同 五月 西 龍白島壹浦和達雲桐八 田田ケの幡 門梅川川淡森雲火山山	勢若黒千龍九中嵐勢増幕 勝ケ龍津位 力淡雲森雲紋山山イ山 下 鶴綾海絆一 ケの 濱浪山誠矢

前前前前小關大 頭頭頭結脇關	同同同同同同同同前 頭	前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭	
芳鬼鞆嵐大若劔 野の鳴	東明 方治 廿三 年 山谷平山門港山 前頭 西一 稟海響八小一西 幡のの 浪山升山錦矢海達	黒株瀧山櫛大山響谷鬼幕 ののの則の鹿 年穢矢音音甲戸響矢音毛 大月勢増大外野大大北北大 位の州蛇 力山碇海山鴻糞海國泉	春上伊真真平 勢の 野汐海鶴力戸 今響若阿千黒 の武年 泉升川松川雲

前前前小關大 頭頭頭結脇關	横綱	同同同同同同同同前 頭	前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
今出綾響一小 羽のの 泉海浪升矢錦	東同 西方 の海 新外野大高大嵐大北 ケ幡鳴劔山	阪泉増響山瀧鬼山櫛大幕 五田位の鹿の 野瀧山矢音毛音甲泉 大高大嵐大北 の州の則ケ蛇 川海山碇戸戸漁經鴻國	春谷真知司真平 日の恵天の 野音鶴矢龍力戸 北上黒若出今千 ケの羽年 海汐雲川海泉川

前小關大 頭結脇關	横綱	同同同同同同同同前 頭	前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
響一綾小 のの海 升矢浪錦	東明 西方 廿四年 雲	大狭外高山北大高櫛鶴幕 戸のの蛇のケの日 平里海浜音國鴻戸甲漁	瀧朝春若眞芳千北 ののの鹿の野年 音汐野川鶴山川海
鬼若八大 闘方月 ケ幡鳴劔 谷港山戸山	大西一 初若立泉遂響大大山 日のの則 川森瀧矢櫻泉戸正	大山 鬼知谷眞平司鞆大 鹿の天の 毛矢音力戸龍平達	芳千北 ののの 山山山浪達錦海矢

前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭	同同同同同同同同前 頭	前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
東明 方治 廿の磨の子 年矢瀧音石糸車雲川毛戸	梅播山平志矢黒朝鬼平幕 の磨の子日鹿の 矢力龍山龍谷山平門山	緋廣眞 の子日鹿の 下
柏阿常綾上若玉西一大 武陸ケののの 戸松山浪沙湊井海矢達山	嵐方月増野勢阿小黒芳藤龍泉 位州武野の 山山力松錦雲山戸門瀧	千出伊 釋勢年迦 川山濱

前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭	同同同同同同同同前 頭	前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
東明 方治 廿の日 一年音矢瀧川瀧音矢毛	山瀧黒朝鬼平谷梅鬼幕 訪のの鹿の 戸谷龍山山平門山	緋平千伊 羽勢のケの 下
上阿綾若嵐小大西一 ケ武ののの 汐松浪沙湊山錦達海矢	達方月若龍藤石大湖阿北今勢 のの部則武 矢	黒芳小千 野年 川門戸川戸松海泉力 雲山錦川

前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭	同同同同同同同同前 頭	前前前前前前前 頭頭頭頭頭頭
東同 知方 五 龍 芳 伊 西	司鬼八海鞆若大劔 ののの鹿の 龍谷山山平湊門山 嵐常綾大小西一 野陸ののの 山山山浪達錦海矢	千伊知眞 羽勢恵 ケのの 瀧音戸妻浜川矢矢毛音 嶽濱矢鶴力 下 北大大北 即州のの 海戸纏風升力山海泉川 雲川山海

横綱	同同同同同同同前頭	前頭	前前前前前前前前前前前小頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭結
東明	天藤虹鳳松柏勝大高芳幕綾	大外高大大千今出達北朝一	蛇の年羽の年の
西方治	天藤虹鳳松柏勝大高芳幕綾	蛇の年羽の年の	鴻海戸泉達川泉海矢海汐矢
の海	二十	六風嶽巖風關戸平碇浪山	響知鬼大眞大司平鞆鬼若谷
大關	西年	方一小大高唐者越千立大音	惠鹿天のケの
八幡	月	天則千のケ代戸羽	矢矢毛纏力砲龍戸平谷港音
山	龍戸穂辛森岳崎嵐崎山		

同同同同同同同前頭	前頭	前前前前前前前前前前前小關大	
同	頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關		
年	猫玉野唐一藤芳越天柏幕	大響大高大今出外北若大千響朝小	
五月	州のケ津	蛇羽の年	
	又龍山辛力嶽山嶽風森	纏矢碇浪渦泉海海海港達川升汐錦	
	下		
	熊梅高千雷立大小勝小	鳳真知音平鬼鞆高大鬼司谷大達大	
	ケ千代戸天松	惠羽の鹿ののケ天の戸	
	谷崎嵐崎山嵐崎龍平山	鳳力矢山戸毛平戸泉谷龍音砲矢平	

同同同同前頭	前頭	前前前前前前前前前前前小關大	
	頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關		
松猫越海玉藤幕	音高天響芳大大大若今大外千響朝小	東西	
ケケの	羽津野蛇の年	の海	
関又嶽山龍嶽	山浪風矢山纏渦碇港泉達海川升汐錦	大關	
下		西方	
狂勝梅店雷高	鬼小小鳳大平鞆知大鬼出高大谷司達大	八幡	
ケ千	鹿天松戸ののの惠羽のの天の戸	山	
島平崎辛山砲	毛龍山鳳崎戸平矢泉谷海戸砲音龍矢平		

小關大	橫綱	同同同同同同同前頭	前頭	前前前前前前前前前前前
結脇關	東同	頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭		
一絃小	西方年	猫背野音北大外大高幕筑	達響大芳北出千朝今	
の	の海	の州羽蛇月の波	波の野羽年	
矢浪錦	五月	又森山山底渦平海灘渾	山矢矢泉山海海川沙泉	
鬼若八	大西	黒藤山唐虹大大立高知	泉鬼眞樋海平鞆谷司	
ケ 舶	關方	のケ則の恵の	鹿のの天	
谷港山	劍山	緘嶽音辛嶽庭戸嵐月矢	瀧毛力甲山戸平音龍	

小關大	橫綱	同同同同同同同前頭	前頭	前前前前前前前前前前前
結脇關	東明	頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭		
一絃小	西方治	猫勝雷若野坑高外大幕	音大大出響達千北朝響	
の	の海	の州波のの蛇羽の年	羽の年	
矢浪錦	廿五	又平山森山山月海渦渴	山纏泉海矢矢川海沙升	
鬼若八	大西一	月柏千大大唐藤山虹立泉	知鬼樋大平眞海鞆谷	
ケ 舶	關方	代ケ則ののケ	惠鹿戸のの天の	
谷港山	劍山	奇崎嵐戸辛嶽音嶽嵐瀧	矢毛甲平戸力山平龍音	

關大	橫綱	同同同同同同同前頭	前頭	前前前前前前前前前前前
脇關	東同	頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭		
響小	西方年	大若野勝柏植立高大幕	高芳外出千大達大朝北響	
の	の海	六則のの州蛇の野の年の	羽の年	
升錦	六月	戸森川山平月又嵐渦渴	戸山海海川泉矢達沙海升	
大八	大西	藤天雷唐山千高虹大大	知音大鬼響鞆司大眞平谷	
戸幡	關方	の津のケ	惠羽鹿の天戸の	
平山	劍山	嶽嵐戸辛音嶽嶽嵐瀧	矢山纏毛矢平龍平力戸音	

(九五四)

附 番 摸 相

前前小關大頭頭結脇關	横綱	同同同同同同同前頭	前前前前前前前頭頭頭頭頭頭
若外千朝小の年	東同西の海	年熊増横岩猫雷狹鬪響幕	高大一天不越若大
港海川汐錦	年五月	田戸木布の風川車川野又山里音矢	津知ケ
海鳳大谷大の山鳳砲音碇	大西開大方戸平	淀祇山知松勝兩鐵升征	森泉力風火嶽港達
	下	園の惠ケの	梅唐鬼小出小鬼司
		ケ鹿松羽天ケ天	下
		川山音矢頭平國り戸島	崎辛毛山海龍谷龍

大關	横綱	同同同同同同同前頭	前前前前前前前頭頭頭頭頭頭
小海	東明治年	限猫増横升松當狹勝岩幕今	鐵不響大高出天玉越北響
錦	西の海	廿九年川又川車戸若矢里平野	知の羽津ケ
大關	大西開	一月祇猪逆鬼錠松兩若雷店	り火矢泉森海風龍嶽海升
大戸	大方戸	圓ケ	小鬼梅高大鬼一小大大大
平碇	平碇	山シ鉢若島開國島山辛	天ケケ蛇鹿松戸
			矢龍谷崎浪渦毛力山達纏崎

同同同同同同同前頭	前頭	前前前前前前前頭頭頭頭頭頭	前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關
瀧限横猫岩兩岩鐵逆當幕	今	鉄高高狹若出天玉越外響若北千朝	横綱
戸本ケリ	の布	の布の羽津ケの年	同同同同同同同前頭
嵐川車又川國野嶽矢	泉	り森浪里島海風龍嶽海升湊海川汐	前頭
鬼御友黒祇升増松雷跡	響	不循唐小一梅大鬼大鬼小谷風海大	前頭
船の圓の田ケ	知	天ケ蛇鹿ケ松の	同同同同同同同前頭
若鴻藤岩山戸川纏山平	矢	火甲辛龍力崎浪毛纏谷山音凰山砲	前頭

觀 大 摸 相

同前頭	前前前前前前前頭頭頭頭頭頭	前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關	横綱	同同同同同同同前頭
高鬼幕	響鳳大海玉越天若大北外響千朝小	千鹿蛇ケの津の年	東明治二年	同同同同同同同前頭
穂毛	矢鳳潟山龍嶽戸風港達海海升川汐錦	下	西の海	同同同同同同同前頭
唐一	小知大御出高鬼大小大司大達谷大大	天の用の羽ケ戸松天の戸	大關八幡山	同同同同同同同前頭
辛力	龍矢泉木海浪谷崎山纏龍纏矢音砲平	辛力	山嵐崎力	同同同同同同同前頭

前前前前前前前頭頭頭頭頭頭	前前前前前前前小關大頭頭頭頭頭頭結脇關	横綱	同同同同同同同前頭
高天大鳳越海今若玉北外響千朝小	津蛇ケの年汐錦	東同西の海	同同同同同同同前頭
津蛇ケ	浪風潟鳳嶽山泉港龍海升川	年五月	同同同同同同同前頭
御響鬼出小高大達大司大大大谷大	御響鬼出小高大達大司大大大谷大	西	同同同同同同同前頭
用ケ羽松の戸天の戸	用ケ羽松の戸天の戸	方	同同同同同同同前頭
木矢谷海山戸達矢崎龍纏砲碇音平	木矢谷海山戸達矢崎龍纏砲碇音平	山	同同同同同同同前頭

前前前前前前小關大頭頭頭頭頭結脇關	横綱	同同同同同同同前頭
玉海今響外響千朝小	東明	同同同同同同同前頭
の年	西の海	前頭
龍山泉升海矢川汐錦	二十九年	前頭
高大大鳳大大大谷大	一月	前頭
蛇戸の戸	前頭	前頭
浪潟崎鳳纏砲碇音平	山	前頭

(一六四) 附 番 摂 相

前前前前前小關大
頭頭頭頭頭結脇關
東明 淡隈八兩岩玉熊錠岩雷幕 高黑玉增
大大當狹源若逆朝小
蛇り布氏 小三路 戸ヶ木見田
鴻纏矢里山渢鉾沙錦
横梅小谷松大荒海鳳
の松のケ戸 西年 下
車谷山音號平岩山鳳砲 江龍り鴻嶽風川演平谷 島車辛火

前前小關大橫 同同局同局同局同局同前
頭頭結脇關 綱 前前前前前前前
東同 小方年 溝谷岩熊金八雷錠岩玉幕 增高外北黑千越大
鬼若源逆朝 錦五月 の戸ヶ木見の年ヶ見
ケ氏 谷渢山鉾沙 關西 下
梅海大荒鳳 の戸 大 鎧虎鶴御鳴勝松甲稻鶴 唐若鬼天小不高鬼
谷山平岩鳳砲 り勇音鴻龍平風 川演 辛島毛風龍火浪谷

橫綱 同同局同局同局同局同前
東明 小方治 岩高待八金利谷熊甲常幕
錦十 二戸千乳 根のケ陸 木見田見蛇 年ヶの
關西年 下 二川穂山鶴山川川嶽 山野風山海川崎鴻纏川嶽岩海
荒月 一御淡越松鬼鳴嶽鳴稻唐 小天鶴若不玉當鬼小松谷狹
岩 船路の龍瀬の門瀬 天津ヶ知のり鹿松ヶの布
力 鴻洋音風山川越龍川辛 力龍風濱島火井矢毛山關音里

(〇六四) 觀 大 摂 相

同同同前頭 前前前前前前前前前前前前前
岩鐵壘松幕 出横當高逆玉外若響若天北越千源鳳小
本ヶ田ヶ 羽りの津ヶ年氏
野嶽川關 海車矢浪鉾龍海島升湊風海嶽川山鳳錦
下 高唐小鬼狹梅不楯一大大鬼小海大谷大
國勝兩荒 の天鹿布ヶ知 蛇ヶ松の戸
山平國岩 戸辛龍毛里崎火甲力鴻纏谷山山砲音平碇

前前前前前前前前前前前前前
頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭
東明 松不橫玉一外當大北越千逆若響源小朝
鬼知 のりヶ年氏 二十
關火車龍力海矢纏海嶽川鉾渢升山錦 沙り川嶽又嶽川山
唐楯鬼小梅荒鬼狹高小大天大谷海大鳳方月
鹿天ヶ ケ布松蛇津の戸 高祇錠升玉淡猪
辛甲毛龍崎岩谷里浪山鴻風砲音山平鳳 森山島戸風洋シ

前前前前前前前前前前前前前
頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭
東同 外大北當千越松響逆源若朝小
のり年ヶケ氏 五
海纏海矢川嶽關升鉾山渢沙錦 月
鬼狹小鬼高天小荒大谷大海鳳
ケ布松鹿津天蛇の戸 下
谷里山毛浪風龍岩鴻音砲山鳳平
風洋演森平谷島川國川

(五六四) · 附 番 摆 相

相撲大觀終



觀 大 樸 相 (四六四)

同同同同前頭	前前前前前前前前前前小關大橫 頭頭頭頭頭頭頭頭頭頭結脇關綱
錦湊頂増稻幕	出有狹松不大當鶴松鬼響國谷海荒鳳梅大方
花田瀬	來布の知戸リケケ龍見のの砲
山崎キ川川	山明里風火崎矢濱關山矢山音山岩凰谷大
下	谷外北天高野千越大鬼尼小源若大逆稻常關西方
縁荒甲鳴藤	のの津見州年ヶ見ヶ松氏蛇陸朝
瀬見の	川海海風山山川嶽崎谷崎山山港潟鉢川山汐
島鷲川嶽	

前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	小關	大關	橫綱	同同同同同
不大	松鶴	狹出	鬼響	當	小松	谷海	鬼國	荒梅	東明	治	三十五	西	方	獄追朝	小金		
知戸の	ヶ布來	ケ	り	松ヶの	龍見	ヶ	砲	砲	三十	年	五	年	一	の日左			
火崎	風濱	里山	谷矢	矢山	關音	山山	岩谷	大關	朝	西	方	一	月	越里龍倉山			
北外稻	有越天	尼谷千	大大源	若逆	稻鳳常			朝						四大朝利小			
の瀬	ヶ津	ヶの年	見蛇氏			陸								江日根武			
海海川	明嶽	風崎川	川崎	鴻山	湊鉢川	鳳山		汐						鄉山獄川藏			

發兌元

東京市日本橋區
本町三丁目

博文館

明治二十六年一月十三日發行
明治二十六年四月廿八日再版發行
編述者 三木貞一
編述者 大橋新太郎
著權者 博文館
所 有 權 者 博文館
發印 所 東京市日本橋區本町三丁目八番地
三 白 土 幸 力
東京市神田區美土代町二丁目一番地

明治二十六年一月十三日發行
明治二十六年四月廿八日再版發行
刷
定價金參拾八錢

三木貞一

大橋新太郎

白土幸力

光堂

第一編 参 石定碁園 門入碁園

(版三第) (版七第)

故小林鉄次郎氏肖像入
本書は第一に手段の何物たるかを知らしめるが爲め術語と對照して最も要なる手段を説明し、次て其問題(詰碁)を設けて練習に供したり之れ入門の捷徑順序たるを以てなり。

第二編 方詰碁園 初歩

(版四第) (版四第)

定石を圖むことを得るに至れば最早其本道に歩を進めたるものなりされど邪路に踏入り其正式を誤まるもの多し兎に角此時の注意は斯道の大切時明たり本編詳に其法規を示して最も懸切を極む

正價金拾五錢 郵稅四錢
正價金拾五錢 郵稅四錢
正價金拾五錢 郵稅四錢

最も弘く世に喜ばる、二つの遊技を頗る面白く書き綴りて。一冊に收めたるもの。相撲の部は、相撲の趣味、相撲協會の組織を始め、力士の生活、力士の養成法、力士談片、力士概評、力士の体格等を詳叙し、芝居の部は、劇評諸家訪問録に坪内千葉、依田、河竹、河尻等諸家の劇に關する意見を紹介し、藝園茶話に團菊、左等諸名優を始め、梨園の逸話を遺もなく網羅したり、蓋し好角家たると、好劇家たるとを問はず、必ず一書を座右に備ふべき好著なるべし。

相撲と芝居

正價貳拾五錢 郵稅六錢
正價貳拾五錢 郵稅六錢
正價貳拾五錢 菊判

好力士輩出して相撲の盛ん極る今日の如きは、おらず、本書は「相撲通の参考」となり、相撲を知らざる者の案内の徒然を慰むる料と近十年二季大場所の景況と、最近十一年力士成績表、「明治廿年以後の番附あり」、力士の母と「伊勢の海の妻」と力士女房氣質「さわやか」を紹介すべく、相撲一夕物語は近衛公爵の力士評「坂倉翁の今昔談」「双龍齋」には「相撲の沿革故實」を敍し、「谷風、小野川、盛時の番附」を添へ、「四十八手圖解」は、説明頗る丁寧に、餘興として「力士の講話」を卷末に附す相撲舊稿として、古來未曾有のものなるべし。

上司子介君、山岸荷葉君合著

(再版)

相撲新書

正價貳拾五錢 郵稅四錢
全壹冊 洋裝 袖珍 美本

上司子介君編

(第六版)

集全碁園

第五編

第七編

碁石定先互法

(卷上)

(刊既)

拔く。

正價金拾五錢 郵稅四錢

第三編に示せしは實に九牛の一毛に過ぎず即ち定石は通常分ちて置碁定石、互先定石の二つあり前に示せしは置碁定石の一分のみ本編に於ては繩索利を争ひ互に一步も譲らざるの手段を探るものなり其變化の赴く所圖るべからず玄妙愈々妙。

本編には井目、六目、四目、五先の布石法を懸示せり而して八目、七目五目等は大同小異たるを以て之を略せり互先の石立は碁客の重視する所なるを以て編者特に深く注意し前半は古風の精を摘み後半は今代の粹を抜く。

第六編

評

古今家

(既)

碁打家

(刊)

考

に資する所甚多し。

正價金拾五錢 郵稅四錢

第八編

碁定先互

(卷中)

(刊既)

本編には小目に於ける三間夾より一間夾高掛り二間高掛り大斜走掛井に大目に於ける全部を説示せり互先の妙所は愈々本編に入りて自得する所多かるべし後編に進み所謂碁家の秘蘊悉く茲に完修するを得べし。

正價金拾五錢 郵稅四錢

第九編

碁定先互

(卷下)

(刊既)

本編には正保の昔より寛政の末年に亘れる百五十餘年間に於ける名匠の打碁を選擇し正しく年代を追ひ之を順次に掲載せるなり越する處の棋譜は棋聖遺策のもの最も多く元丈、知得の對局之に次ぐ

正價金拾五錢 郵稅四錢

碁打人名

(近古)

(刊既)

本書は正保の昔より寛政の末年に亘れる百五十餘年間に於ける名匠の打碁を選擇し正しく年代を追ひ之を順次に掲載せるなり越する處の棋譜は棋聖遺策のもの最も多く元丈、知得の對局之に次ぐ

正價金拾五錢 郵稅四錢

續刊

第十編

碁打人名

(古近)

(刊既)

本書は享和元年より安政年間に亘れる五十餘年間に於ける名匠の打碁中其の尤なるもの四十局を精選し正しく年代を追ひ之を順次に掲載せるものにして百五十手以上の手數を費したる打碁は百手毎に二面以上に分較し以て研究上観察に便せり

正價金拾五錢 郵稅四錢

以上十二冊を以て

以下御入用の御方は取揃へ御注文あらんことを希望す

二冊

既

●今代名人打碁集

正價金拾五錢 郵稅四錢

續刊

既

本書は享和元年より安政年間に亘れる五十餘年間に於ける名匠の打碁中其の尤なるもの四十局を精選し正しく年代を追ひ之を順次に掲載せるものにして百五十手以上の手數を費したる打碁は百手毎に二面以上に分較し以て研究上観察に便せり

正價金拾五錢 郵稅四錢

内 外 遊 戲 全 書

全 部 拾 五 冊 完 結

- 第一編 ● 端 艇 競 潛 第八編 ● 陸 上 競 走
 - 第二編 ● 新 游 泳 術 第九編 ● 鳥 獣 狩 獵 法
 - 第三編 ● クリスボーリー 第拾編 ● 室 内 遊 戲 法
 - 第四編 ● 射 的 術 及 弓 術 第拾壹編 ● 昆 虫 採 集
 - 第五編 ● 銃 獵 案 内 第拾貳編 ● 漁 魚 集
 - 第六編 ● 庭 球 術 第拾參編 ● 福 引
 - 第七編 ● 玉 突 術 第拾肆編 ● 蹴鞠 及 自轉車
- 正價 ● 壱冊金拾貳錢 ● 六冊前金六拾六錢 ● 拾貳冊前
金壹圓貳拾五錢 ● 郵稅壹冊金四錢御注文前金 發 文 博 文 館 兑

健全なる精神は健全なる身體に存すると實に精神身體の保育は須らく兩
々相並行せしめざるべからず殊に學生の體軀健全活潑ならされば中途に
廢學する虞あるのみならず徃々夭折の不幸を見るあり今や内外遊戯全書
出づる豈に偶然ならんや

十七世 本因坊 土屋秀榮校訂
新撰圍碁錦囊

圍碁大家 峰崎健造君序文
圍碁大家 小野五平君序文
圍碁と將棋

● 正價金七拾錢 郵稅四錢

● 正價金廿五錢 郵稅六錢

世に排悶抒情の具鮮なからずと雖其技の
溫雅高尚にして最も趣味深きものは圍碁

を以て第一とすべし本書は斯道の大家十七世本因坊秀榮翁の校訂になり天地玄黃
日月星辰虚々實々秘術を指導せらる一局
の輸贏以て半日の閑も消すべし以て百年
の清興を領すべし

本書は圍碁及び將棋の秘術方略を縦横詳述し併せて古
今斯道の大家が奇謀好策雄を決したる手合の實例を
添へ一讀人をして其好手妙突神機秘術を知らしむるに
あり而して書中收むる所は原始、順序、新古の定石、
批評註釋圖解等を細羅し靈頭又趣味ある事項を滿錄す
興味津然紛々たる在來の書を大に其趣を異にせり讀ふ
讀々御愛讀あらんことを希望す

中學世界 記者 上村左川君編 (第六版)

劍刀流 開祖日比野正吉君著 (十版)

内外遊戲法

菊洋判裝

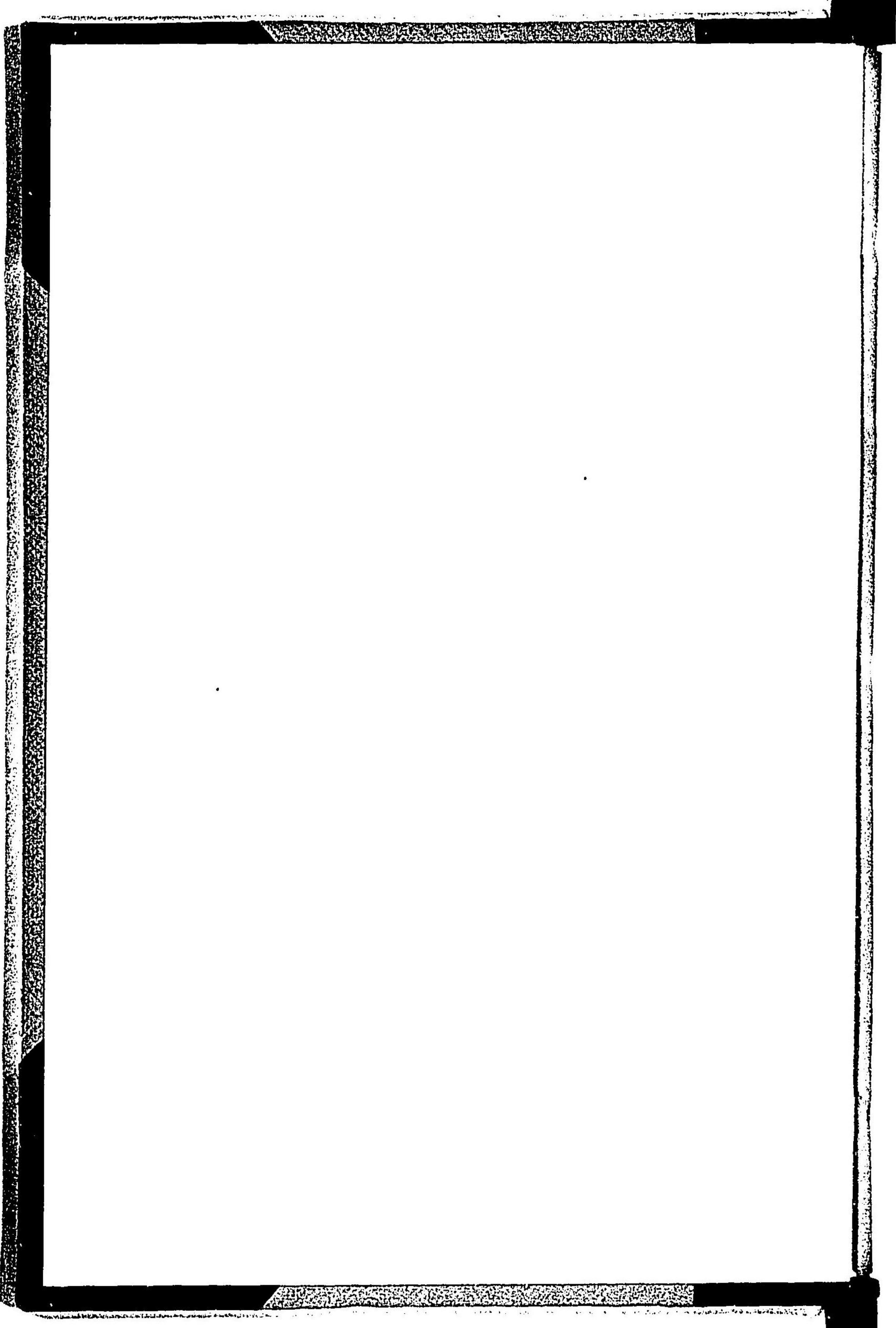
劍舞術教範

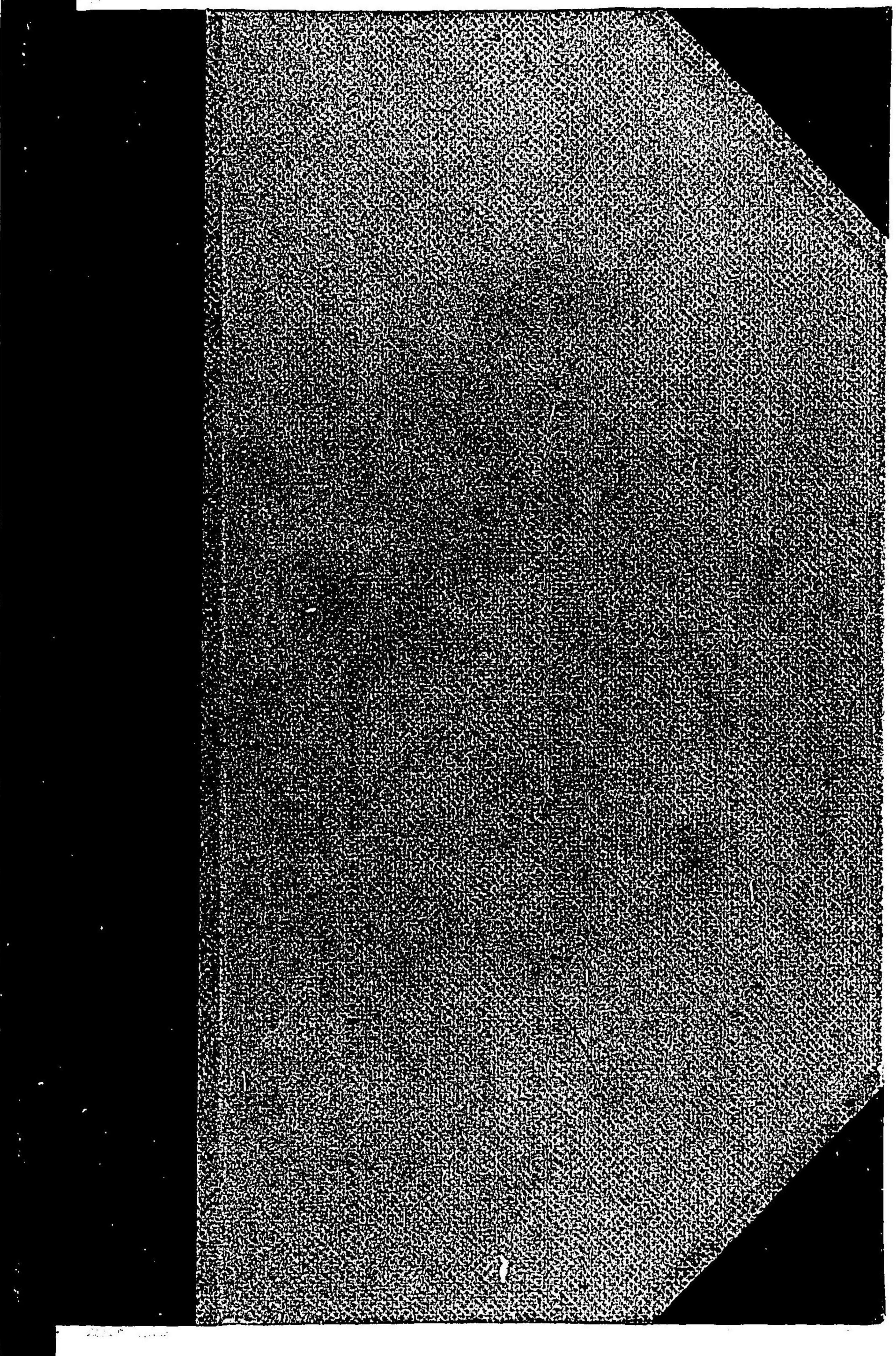
四六判裝

全壹冊 正價金貳拾六錢 郵稅金六錢
健全なる精神は健全なる身體に宿る。世の生たるもの將來有爲の素を養はんと欲せば、必ず適度遊戯を行ひ、先づ身體精神の健全を圖るを要す、遊戯の法輕んすべからざるなり。此書は本邦在來の遊戯は勿論、現今泰西諸國にて流行する遊戯法に至る迄汎く之を網羅し所載の種目無慮貳百四十ドボーリ、ベ・スポ・ル、ラ・ウンダ・ス、水泳、劍舞、弓術、銃獵等より理學的文學的教育智育の上に裨益すべきものは、一として購ふて勤學餘暇の伴侣と爲さんことを期す。

劍舞の行はるゝや久し、而かも世の所謂劍舞は嫵媚態を成し、絶えて精神骨力の見るべきなし、其技たる倡優妓女と相距ると果て幾何ぞ、我神刀流劍術開祖日比野正吉氏果て斯の居合道に生面を開く、其術たる劍法柔道及ぶ居合法の極意を取り、打して一丸となせるもの、其壯快活潑なる懦夫をして奮はしめ、其悲壯淋漓なる猛士をして泣かしむ。所謂不動心の極意の如きは直に人の心法に關すひて是等諸道の粹を取りて、獨り而も劍術柔術皆多少の難あるを見る、獨り而も此極意を會得せば、膽氣海を呑みへし、方今青年體育の問題漸く世間に高し、而も此極意は是等諸道の粹を取りて、獨り而も劍術柔術皆多少の難あるを見る、獨り而も此極意を會得せば、膽氣海を呑みへし、方今青年體育の問題漸く世間に高し、而も此極意を會得せば、膽氣海を呑みへし、方今青年體育の問題漸く世間に高し、而も此極意を會得せば、膽氣海を呑みへし、方今青年體育の問題漸く世間に高し、而も此極意を會得せば、膽氣海を呑みへし、

發兌元 東京市 本町三 博文館





788.1

M466_{A2}

事 故 本

乱丁

(P1~2
P3~4)

075529-000-4

788.1-M466s2

相撲大観

三木 愛花

山田 春塘／編

M36

CEM-0476





336950

